世界名作ものがたり 33

ふしぎな島のフローネ

家族ロビンソン漂流記

文／松田昭三





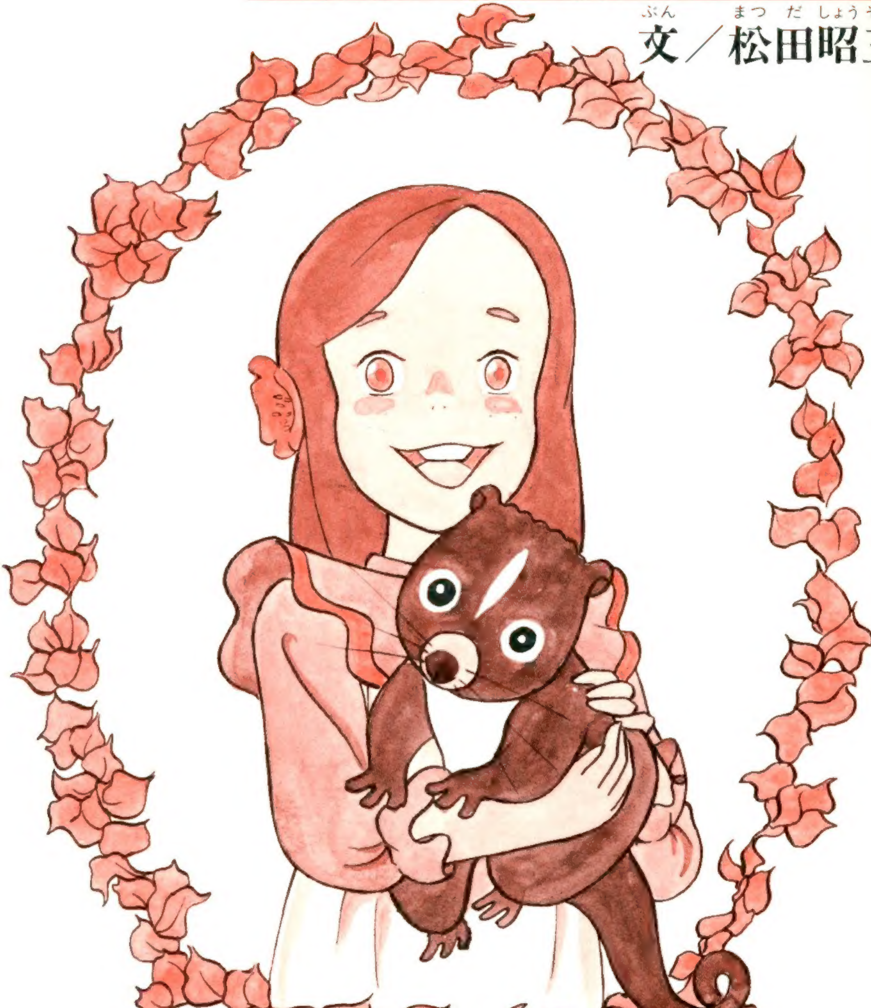


世界名作ものがたり

ふしぎな島のフローネ

家族ロビンソン漂流記

文／松田昭三



朝日ソノラマ


むじん島でもだいじょうぶ。
フローネは、いつも元気です。

みなさんへ

松田昭三

この本は、フローネというとても元気のよい女の子の話です。

フローネは、あまり元気がよすぎて、ときどき大しっぱいをします。そのかわり、ひとがおもいもよらないような、すばらしいことも、つぎつぎにやってのけます。

そんなフローネが、だれもいない島へいくことになるのですから、たいへんです。

さあ、どんなことになるでしょうか。わたしはせきにんをもちませんよ。なにしろ、フローネときたら、話をつくったわたしでさえ考えもつかないことを、かってにやっちゃうんですから。

なに、それはおかしい、あなたがつくった話だろうって？　いえ、本当なんですよ、読めばわかります。



ふしぎな島のフローネ◎もくじ





このものがたりのなかまを しょうかいします



◀一家の中心
おとうさん



◀プチクスクスの
あかちゃん
名前はメルクル



▲船をつくった老人



私、フローネ



▲やさしい おかあさん



◀私の弟 ジャック



◀たよりになる
ジョン



▲おにいさん フランツ



▲オーストラリア人の少年

ふしぎな島のフローネ

家族ロビンソン漂流記



この本では，原則として，小学校２年までに
習う漢字を使用し，漢字にはすべて，ふりが
なをふってあります。

1 一通の手紙

フローネが、にわの木にのぼって、町の通りをながめていると――。

十さいの女の子が、どうして木にのぼるのかって？ それはこういうわけです。

フローネという女の子は元気がありすぎて、おはじきとか、ままごととか、人形のきせかえとか、おとなしくすわってするような女の子のあそびではものたりなくて、男の子のすることもやってみたいからなのです。

ですから、フローネは木のぼりどころか、あいてさえいれば、レスリングだってボクシングだってやりたいのです。

フローネは学校の帰り、さか立ちしてどれくらい歩けるか男の子ときょうそうしたことさえあるのです。

そんなわけで、フローネは家にいても、たいくつすると、よくにわの木にのぼるのです。

それに、その木はちょうど二かいのフランツのへやのまどのところにのびていて、木の上から、

「おにいちゃん、こんにちは。」

と、あいさつすることもできるのです。

フランツは十五さいになる兄で、妹のフローネとはせいかくがまるっきりはんたいで、あまりらんぼうなあそびはしません。スポーツはにが手で、音楽が大すきというおとなしい少年です。

ですから、フローネが木にのぼって、

「おにいちゃん、こんにちは。」

というとき、フランツのほうはたいていまどぎわで、ギターをひいたりフルートをふいたりしています。

この日も、フローネが木にのぼっていると、フランツはまどぎわでギターをひいていて、

「フローネ、おまえ、そんなに高いところまでのぼって、こわくないのか。」

と、おどろいていいました。

「ぜーんぜん、こわくなんてないわ。高いところはきもちいいわ。ながめもとてもいいし。」

と、フローネは、へいきで答えました。

こんなふたりを見ると、おかあさんはいつもこういってこぼすのです。

「ああ、フローネが男の子で、フランツが女の子ならいいのにねえ。こまったことだわ。」

さて、フローネが、にわの木にのぼって、町の通りをながめていると、ゆうびんはいたつがフローネの家のほうへ近づいてきました。

ゆうびんはいたつも、木の上のフローネに気づいて、一通の手紙をふって見せました。

「あっ、お手紙。」

そうさけんだとおもうと、フローネはものすごいはやさで、するすると木をすべり

おりました。
二かいのまどから、フランツがさけびました。
「ぼくのところへきたんだ。フローネ、おかあさんに見せないで、まっすぐぼくのところへもってこいよ。」
「はい、お手紙。」
と、ゆうびんはいたつは、フローネに手紙をわたしました。
「ありがとう。」
フローネは手紙のあて名を見ました。それはフランツではなく、おとうさんあてになっていました。
「おあいにく。おとうさんにきたのよ。」
と、フローネは二かいのフランツにさけびました。それから、
「おにいちゃんたら、きっとガールフレンドからでもきたと思ったんだわ。」
と思って、おかしくなりました。
ところで、そのおとうさんあての一通の手紙が、一家のうんめいを大きくかえるこ



とになろうとは、その時フローネは思ってもみなかったのです。

フローネがすんでいるところは、スイスのベルン市です。ベルン市というのは、スイスの首都です。そこでフローネのおとうさんは、いしゃをしています。

かぞくは、おとうさんとおかあさんとおにいさんとそれから弟のジャックがいます。

そのほかに、お手つだいのマリーがいっしょにすんでいます。

これまで、とくにふじゆうなこともなくすごしてきました。フローネも兄のフランツも、いや、おかあさんだって、このままベルンで、へいわな一生をおくるものと思っていたのです。

ところが、そうではなくなったのです。みんな一通の手紙がげんいんです。

その手紙は、おとうさんがウィーンの医科大学でいっしょに学んだ時の、イギリス人の友だちからきたのです。

そのイギリス人の友だちは、オーストラリアで、やはりいしゃをしていて、オーストラリアでは、いしゃがたりなくてこまっているから、おとうさんにもぜひオースト

ラリアへきてくれるようにといってきたのです。

「三十三びき、三十四ひき、三十五ひき、三十六ぴき……」

さっきからフローネは、ベッドの中でヒツジの数をかぞえています。ねむれないときはヒツジの数をかぞえるとねむくなるというからです。

でも、百ぴきまで数えても、まだねむくなりません。かえってますます目がさえるばかりです。

フローネは、カンガルーのいるオーストラリアへいけると思うと、こうふんしてねむれなくなってしまったのです。

男の子のようにぼうけんずきなフローネにとって、まだ知らない遠い国へいけることはうれしいことなのですが、ねむらなければならないときに、どうしてもねむれないのは、とてもつらいことです。

いまはもうま夜中です。家中で、まだねむらないでいるのはフローネだけです。となりのベッドでは、小さいジャックがグウグウ大いびきをかいてねむっています。そ

のいびきがじゃまになって、よけいフローネはねむれません。ジャックの寝顔がにくらしくなってきます。

フローネは、ベッドから体をのばすと、カーテンを少しだけあけて、外をのぞいてみました。

外はまっくらです。まだまだ朝までなん時間もあります。

弟のジャックがまだ生まれないうちだったら、こういうとき、フローネはおかあさんのへやへとんでいって、おかあさんにだかれてねむるのですが、十さいにもなったいまでは、きまりがわるくて、そんなあまえたことはとてもできません。

でもフローネは、ひとりで目ざめていることにとうとうがまんができなくなりました。パジャマのままそっとろうかに出ると、おてつだいのマリーのへやをノックしました。

「マリー、マリー。」

なかで、

「はい、おくさま。」

と、マリーの答える声がして、ドアがあきました。

マリーは、おかあさんが用があっておこしにきたと思ったのでしょう。おかあさんでなくフローネが立っているのを見て、びっくりしていいました。

「まあ、フローネ、どうしたの。」

「ねむれないの、フローネ、目がさえて。」

マリーは、いいきもちでねているところをおこされたのですが、少しもいやな顔をしないでいいました。

「そう。じゃ、おはいりなさいな、フローネ。」

そして、フローネがへやにはいると、

「さあ、はやくわたしのベッドにおはいりなさい。ねむれるまでなにかお話してあげるから。」

といって、自分はパジャマの上にガウンをはおって、ベッドのそばにいすをひきよせて、こしかけました。

フローネは、マリーのベッドにもぐりこみました。

マリーのねていたぬくもりが、まだのこっています。まだ小さいとき、おかあさんのベッドにもぐりこんだときと同じです。

「マリー、お話より歌がいいわ。なにか歌って。」

マリーは本が大すきで、いろんな話を知っているのですが、歌もたいへんじょうずなのです。だから、そうじやだいどころのあとかたづけをしながらでも、よく歌っているのです。

そのうつくしい声を聞くたびに、あまり音楽がとくいでないフローネは、マリーがうらやましいと思うのです。

フローネがマリーを大すきなのは、フローネのできないことをマリーができるからかもしれません。

マリーはフローネのようなおてんばではありません。しとやかで、やさしいむすめなのです。

「いいわ。子もり歌をうたってあげるわ。」

そういうと、マリーはしずかに、ということは声をひくくしてということですが、

歌いはじめました。

ほかの人はみんなねしずまっているま夜中なのですから、大きな声で歌うわけにはいきません。

ねむれ
ねむれ
母のむねに

声をおさえてひくく歌うと、マリーの声はいっそううつくしいのでした。

フローネはうっとりききいっているうちに、いつのまにかねむってしまいました。

ベッドをフローネにせんりょうされたマリーは、床にねなければなりませんでしたが、フローネのやすらかな寝顔を見ると、かえってうれしそうに床にねたのでした。

いよいよオーストラリアへしゅっぱつするとき、フローネがたったひとつかなしかったのは、このやさしいマリーとわかれることでした。

2　おとうさんのかつやく

フローネの一家は、すみなれたベルンの町にわかれをつげて、ライン川を下り、イギリスを回って、オーストラリア行きの船にのりました。

今から百年もむかしのことですから、ひこうきもなければ、船もあまりはやく走れません。ヨーロッパからオーストラリアまでは、船で二か月いじょうもかかります。

みんながそろそろ船のたびにあきてきたころに、ひとつのじけんがおきました。じけんのげんいんは、なんとジャックだったのです。

この船にはオーストラリアのえらいやく人が、おくさんといっしょにのっていました。このやく人は、いじのわるい人で、いつもいばっていました。

そのやく人のおくさんのぼうしを、ジャックがいたずらしていて、海へおとしてしまったのです。

船は走っていますから、海へおちたぼうしは、見る見るうちにうしろへながされて

いって、見えなくなってしまいましたから、さあ、たいへん。

フローネが、ジャックをかんぱんであそばせていて、ちょっと目をはなしたすきのことです。フローネのせきにんです。

やく人は、子どものジャックやフローネでは話にならないからと、おとうさんをよびつけて、たいそうおこっていいました。

「あのぼうしは、パリでつくった、せかいにたった一つしかないぼうしだ。およいでいってひろってこい。」

船はぜんそくりょくで走っているのですから、たとえ、すいえいのせんしゅでも、そんなことができるわけはありません。

「もうしわけありません。」

おとうさんは、ふかく頭を下げてあやまってから、いいました。

「およいでひろってくるなんて、とてもむりです。どうか、お金でべんしょうをさせてください。」

「お金にはかえられないぼうしだ。ひろってくることができないのなら、その子をむ

ちで百ぺんうて。」

と、やく人はジャックをゆびさしていいました。

「この子はまだ小さいので、わるいこととは知らずに、つい、いたずらをしたので、わるぎがあったわけではありません。この子のかわりに、わたしをむちで百ぺんうってください。それでどうかゆるしてください。」

と、おとうさんはいいました。

やく人は、本気でおとうさんにそんなむごいことをさせようと思ったわけではありません。

ただ、いじわるな心から、おおぜいの人が見ている前で、おとうさんに、はじをかかせてやろうと思ったのです。

そこで、つぎに、やく人はいいました。

「そうしてもよいが、あいにくここにはむちがない。もし、おまえが、わたしのつまがはいているくつに、くちづけするなら、ゆるしてやろう。」

「ええ、いたしましょう。」

おとうさんは、すこしもまよわず、やく人のおくさんのあしもとに、ひざまずきました。

ところが、おくさんは、やく人のようにいじわるな人ではありません。おくさんは、おとうさんがくつにくちづけしようとするのを、おしとどめていいました。

「そんなことは、なさらないでください。なくなったぼうしは、わたしのもので、じゅじんのものではありません。どうぞ、もうお気になさらないで。」

おくさんのこのやさしいひとことで、じけんはぶじにおわりました。

おとうさんとフローネばかりでなく、おとうさんにどうじょうしていたじょうきゃくたちも、ほっとしたのでした。

ところで、だんなさまににず、心のやさしいおくさんは、もうすぐあかんぼうが生まれそうな、大きなおなかをしていたのです。

それからなん日かして、船でおまつりがありました。船が赤道をこえるとき、赤道まつりといって、おまつりをするのが船のたびのならわしなのです。

かんぱんがぜんぶしょくどうになって、マストからマストにはったつなに、いろいろな国の国旗をかざり、おきゃくものりくみいんもいっしょになってダンスをします。とくべつのごちそうと、おさけがたくさん出て、食べほうだい、のみほうだいなのです。

フランツは、船の中で知りあったエミリーという女の子とおどりました。おとうさんはおかあさんとおどりました。フローネはジャックとおどりました。ジャックは小さいけれども男の子にはちがいないのです。

みんながダンスにむちゅうになっているときでした、船長が大あわてでとんできて、さけびました。

「どなたか、おいしゃはいませんか。どなたか、おいしゃはいませんか。きゅうにびょうにんが出たのです。」

「船のいしゃがいるだろう。」

と、だれかがいいかえしました。

学校とおなじように、船にもいしゃがいるものなのです。この船にもいるはずなの

です。

「それが、こまったことに……」

船長は、すまなさそうにいいます。

「いるにはいるんですが、じつは、いまよっぱらっていて、びょうにんをみられないありさまなんです。それでおきゃくさまの中に、どなたかおいしゃをさがしているわけなのです」

さけずきの船のいしゃは、赤道まつりで、ついはめをはずし、いつもよりのみすぎて、べろんべろんによっぱらってしまったのです。

「わたしはいしゃです」

と、すぐにフローネのおとうさんがもうし出ました。

「わたしが、すぐにいきましょう。きゅうびょうにんはどこですか。今かばんをとってきます」

おとうさんは、かばんをとってくると船長にあんないされて、びょうにんのまっている船室へいきました。

「びょうにんといっても、じつはおさんなんです。それがなかなか生まれないで、くるしんでいるのです。みてやってください、先生。」

と、船長がいいました。

そこにねてくるしんでいるのは、先日のじけんでいじわるをしたやく人のやさしいおくさんでした。

「おくさま、さあ、あんしんなさい。わたしがきたからには、もうだいじょうぶですよ。」

と、いしゃのおとうさんは、おくさんを元気づけていいました。

「まあ、あなたがおいしゃさん……」

と、おくさんは、くるしみながらもおとうさんの顔を見ると、おどろいたようにいいました。

やく人のおくさんは、おとうさんのおかげで、ぶじに元気な男のあかんぼうをうみました。



とてもはじをかいて、どうにもかっこうがつかず、こまりはてたのは、やく人のほうです。

つい先日、みんなの前で、さんざはじをかかせたおとうさんに、自分のつまとあかんぼうをすくってもらったのですから……。

おくさんは、だんなさまのやく人にむかって、こういってしずかにたしなめました。

「あなた、人というものは、いつなんどき、どんなことがおきて、どなたのたすけをかりなければならないか、わからないのですよ。ですから、ふだんからどなたともなかよくおつきあいをしなければならないのですよ。これからは、むやみにいじわるしたり、いばったりしないでくださいね。」

おくさんにこういわれると、やく人は、もうなにもいいかえすことができません。

ただただ、

「わかったよ、おまえ。これからは心を入れかえて、いばったり、いじわるをしたりしないよ。」

と、やく人は、まるで青なにしおをかけたように、しおれて元気なくいいました。

「わかったら、先生に、先日ぶれいなことをしたのをおわびして、それからよくおれいをもうしあげなければいけませんわ。」

やく人は、おとうさんの前にりょう手をついて、ていねいにあやまりました。

それから、なんどもなんども、

「ありがとうございました。」

と、れいをいいました。

すると、おとうさんはいいました。

「わたしは、いしゃとしてのつとめをはたしただけです。あなたは、よいおくさまをもってしあわせです。」

おとうさんは、もう先日のことには、こだわっていなかったのです。

フローネも、あの時は、いじわるなやく人がにくくてたまりませんでしたが、今はもう、こだわってはいません。

エミリーやジャックといっしょに、おくさんのところへいき、

「わたしたちにも、あかちゃん見せて。」

と、いいました。

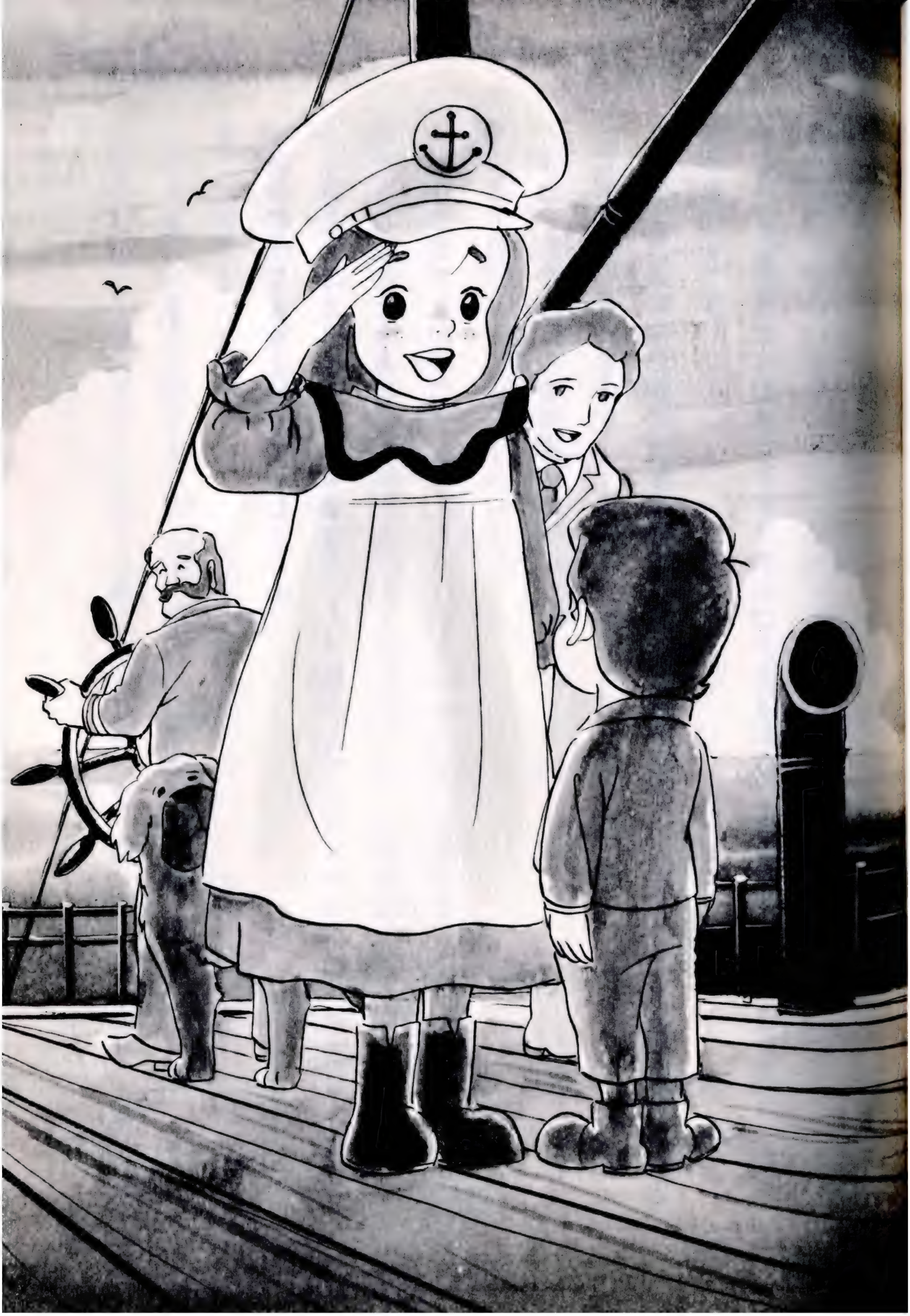
「ええ、どうぞ見てやってちょうだい。」

と、おくさんも大よろこびで、あかんぼうを見せてくれました。それはそれはとてもかわいらしいあかんぼうでした。

おとうさんのはたらきに、船長はたいへんかんしゃして、それからというものは、おとうさんばかりか、フランツやフローネとも、したしく口をきくようになりました。そして、おてんばで少しかわったところのあるフローネに、一日船長や一日コック長をやらせてくれることになりました。

一日船長まではよかったのですが、一日コック長ではたいへんなことになりました。

フローネは一日コック長になると、つぎからつぎへと自分のすきなりょうりをやたらにつくらせて、それを、かたっぱしから食べたのです。よく日は、おなかをこわして、ベッドでうなっていなければならなかったのです。



3　こわいあらし

長い船たびもあと少しでおわりです。

うれしいことにクリスマスがきました。船の上でクリスマスをむかえるなんて、そうぞうしたことがありますか？

じょうきゃくの中の子どもたちだけがあつまって、クリスマスのげきをすることになりました。

ぶたいはかんぱんです。

見る人は、おとなのじょうきゃくとのりくみいんたちです。

まず、三人の東の国のはかせがとうじょうしました。これはふたりの男の子とひとりの女の子です。

「こんどお生まれになったユダヤの王は、どこにおられますか。」

と、女の子がいいます。

すると、フローネのヘロデ大王が、おかしなどら声を出してこういいます。
「なに、あたらしい王が生まれた？　この国の王はわしじゃ　王がふたりになっては
こまる。」
と、男の子がいいます。
「わたしたちは、そのお方の星が出るのを見たのです」
「わたしたちは、そのお方をおがみにきたのです。」
と、もうひとりの男の子がいいます。
すると、フローネのヘロデ大王が、またおかしなどら声でこういいます。
「これ、はかせたち、わしもそのお方をおがみたい。そのお方のおられるところがわ
かったら、わしにしらせてくれ。」
「はい、おしらせしましょう。」
と、女の子がいいます。
すると、フローネのヘロデ大王は、長いしたをぺろっと出して、
「しめしめ、その生まれたばかりの新しい王とやらを、見つけたら、すぐころしてや

る。」
と、いいます。
この時、べつの男の子が、赤い色紙を星の形に切ったのを、ぼうのはしにつけて、高くかかげながら歩きます。
「あっ！　星がうごいた。あの星のいくところへついていけば、そのお方がおられるはずだ。」
と、女の子がいいます。
そして、三人の東の国のはかせは、星について歩いていきます。
星がとまると、その下に、ほんとうの男のあかんぼうをだいたエミリーとフランツがいます。
エミリーはマリアで、フランツはヨセフなのです。そして、イエスは、ついこのあいだ、やく人のおくさんがうんだばかりのあかんぼうです。
「おう、ユダヤの王。」
といって、三人の東の国のはかせたちがイエスをおがみますと、とつぜんそのイエ

スが、

「エーン、エーン。」

となきだしたのには、エミリーがあわてました。

けんぶつせきから、やく人のおくさんがとび出してきて、エミリーからあかんぼうをだきとって、

「イエスさまがないちゃだめじゃないの。」

といったのには、みんな大わらいでした。

みんながたのしくわらっている時でした。ピューッと風の音がしたかとおもうと、パラパラと雨つぶがおちてきたのです。

みんなが、おや、と思って、空をふりあおぐと、船のほが、強い風をうけてぱんぱんにふくらんでいます。

そして、船が大きくゆれだしたのです。

「あらしだ、あらしだ！」

と、だれかがさけびました。
「じょうきゃくのみなさんは船室にはいってください。いそいで船室にはいってください。」
と、船長がいって回っています。
みんなは、われさきに自分の船室にかけもどりました。子どもたちは、フローネもフランツもエミリーも、げきのいしょうのまま走りました。
ゆれがますますはげしくなるので、かいだんやろうかで、ばたばたところぶものもいました。

それからというもの、あらしは五日間もつづいたのです。
じょうきゃくは、自分たちの船室にとじこもったきり、一歩もそとへ出ることができません。
フローネのおかあさんは、船よいでベッドにねたままで、おきあがることができません。



おとうさんは、いしゃなので、けが人の手当てを手つだいにいったきり、帰ってきません。

のりくみいんたちは、船がはげしくゆれて、にもつがころがらないようロープでしばったり、船にながれこんだ水をくみ出したり、船のこわれたところをなおしたりで、たいへんです。

つかれてたおれるものや、けが人がつぎつぎとでます。

マストがおれて、その下じきになった人もいます。

強い風にふきとばされて、海におちたまま、それきりゆくえふめいになった人もいます。

フランツとフローネは、くるしんでいるおかあさんをはげましたり、おびえてなきだすジャックをなだめるのにいっしょうけんめいです。

そのうち、おとうさんがやっともどってきました。なん日もねむらずにけが人の手当てをしていたので、へとへとになっています。どかっとベッドにたおれこんだきり、こんこんとねむりつづけます。

たくさんのけが人が出て、のりくみいんの手がたりなくなると、じょうきゃくの中から、わかい元気な人がかりだされました。フランツはすすんで手つだいにいきました。

ころがらないようロープでしばったにもつを、こんどはロープをほどいて海へすてるのです。そうしないと、船がてんぷくしてしまうというのです。

船にひつようなものも、じょうきゃくのたいせつなものも、かたっぱしから海へなげこみました。

船長のめいれいですから、だれも、もんくはいえません。

フランツが、かんぱんでにもつを海になげこんでいるときです。

ガッガッガッ……という、ぶきみな音がしたかとおもうと、船が大きくかたむきました。

これまでのかたむきかたとはちがっていました。船の前のほうが、空へつき出るように高くもちあがり、うしろのほうはひくく水の中にしずみ、かんぱんはきゅうなさか道のように大きくかたむいたのです。

かんぱんの上にあったものは、みんなずるずるとすべって海の中へおちます。人間までがすべっておちます。
そうです、かんぱんではたらいていたフランツも船長も、ほかのおおぜいののりくみいんたちといっしょに、あっというまに、海の中へすべりおちていってしまいました。
そして、そのままなみにさらわれてしまったのです。
船はいったい、どうなったのでしょう。
ふしぎなことに、船はひどくかたむきましたが、それきりゆれなくなりました。うしろに大きくかたむいたまま、ぴたりとうごかなくなったのです。
どうやら、船は大きないわの上にのりあげたらしいのです。
船のそこにはあながあき、そこからふん水のように海水がはいりこみ、その水がうしろのほうにたまり、そのおもさで、うしろのほうだけが水の中にしずんでしまったのです。
うしろのほうの船室にいた人は、あっというまに水の中にとじこめられて、しんで

しまったにちがいありません。かわいそうに、イエスになったあかんぼうも、うしろの船室にいたのでした。

生きのこった人たちは、じょうきゃくも、のりくみいんも、大あわてできゅうめいボートにのりうつりました。

フローネたちは、かんぱんへ出るのがおくれました。

なぜなら、おとうさんはつかれて、まるでしんだようにねむっていたし、おかあさんは船よいで、これまたしんだようによこたわったままで、すぐには立ちあがれなかったからです。

おとうさんがおかあさんをかたでささえ、フローネがジャックの手を引いて、四人がやっとかんぱんへ出たときは、ボートのさいごの一そうが、人をいっぱいのせて、船をはなれるところでした。

そのボートにはエミリーものっていました。

エミリーはフローネたちを見て、

「まって、あの人たちものせてあげて！」

と、かじをにぎっている人にいいました。

しかし、ボートにのっているほかの人たちが、口ぐちにいいます。

「だめだ。これでいっぱいだ。」

「ひとりぐらいならともかく、四人はむりだ。」

「これいじょうのせたら、ボートがしずむぞ。」

「早く出せ。」

そして、ボートは、かなしいことに、フローネたち四人を、かたむいた船にのこして、はなれていってしまったのです。

しかし、ボートでにげたほうがよかったか、それとも船にのこされたほうがよかったか、それはわかりません。

なぜなら、海はまだあれていて、小さなきゅうめいボートなど、たちまちなみにのまれそうだったからです。

のこされた四人は、その夜、ほとんどねむれずに、かたむいた船の中ですごしました。

ゆれなくなったので、おかあさんの船よいはなおりましたが、フランツのゆくえがわからないのが一番のしんぱいでした。

フランツはどうなったのでしょう。なみにのまれて、それきりしんでしまったのでしょうか。

4 島をめざして

フランツは生きていました。

あくる朝、おとうさんが、かんぱんに出てみると、あらしは夜のうちに、うそのようにおさまって、海はかがみのようにしずかでした。

そして、かたむいたかんぱんの下のほうに、なみにうちあげられたようなかっこうで、フランツが気をうしなってよこたわっていたのです。

フランツが気がついてから話したところによると、船長とフランツは、いったんはなみにさらわれましたが、うんよくマストのおれた切れはしが、なみの間にういていているのを見つけ、それにつかまって、しばらくおよいでいたのだそうです。

そのうち、船からとばされてなみにただよっていたロープが、船長の足にからみついたので、船長はそれをひろって、マストの切れはしとフランツとをはなれないようにしっかりとむすびつけてくれたのだそうです。

そしてまた大きななみがきて、船長はマストのうきからひきはなされてしまいましたが、フランツはマストの切れはしといっしょにういていて、船におよぎもどったのだそうです。
おかあさんは、うれしさのあまり、びしょぬれのフランツをだきしめて、なきだしたほどです。
もちろん、おとうさんも、フローネも、どんなにうれしかったかしれません。
さて、船はそこにあながあいてかたむいているのですから、いつしずむかわかりません。早く、ボートのかわりになるものをつくって、ここからにげださなければなりません。
朝になって、かんぱんから四方を見回すと、そう遠くないところにりく地が見えました。
島です。
五人は――フランツが、ぶじ生きてもどったので、かぞくぜんいんがそろいました

——力をあわせて、おれたマストやいたきれなどをつかって、いかだをつくりました。

こぐだけで、ははやく走れないので、みじかいマストを立てて、ほをつけることにしました。

ところが、ためしにいかだを水にうかべて、ほをあげると、走らないで、すぐひっくりかえってしまいました。

そこで、ほが風をうけてもひっくりかえらないように、いかだをささえるうで木を左右につけて、その先に小さなあきだるをつけることを、おとうさんが考えつきました。

そして、フランツが、うで木のざいりょうを、フローネが、小さなあきだるをさがしてくることになりました。

船の中にある小さなたるといえば、ブランデーのたるしかありません。フローネは船のそうこへブランデーのあきだるをさがしにいきました。

ひとつはすぐみつかりましたが、もうひとついります。ブランデーがまだすこしの

こっているたるがありました。

どうせ、船はたるごとしずむにきまっているのですから、中みはすててもかまいません。

フローネは、たるの口を下にして、のこっているブランデーをすてようとしました。

しかし、フローネは、もったいないという気がしてなりません。

それで、手のひらにブランデーをうけて、ほんの少しですが、なめてみました。

ツーンとはなにつきさすようなきついあじがして、少しもおいしいとは思いませんでした。

しかし、スーッとするような、いい気もちもしないではありません。フローネは、二ど三ど手のひらにうけてなめました。

フローネがなかなかもどってこないので、へんに思って、おかあさんが、おさけのくらへいってみました。

すると、どうでしょう、フローネは、二つのあきだるをりょうわきにかかえたまま、

あおむけにたおれて、くるしそうにうなっているではありませんか。なんと、十さいの女の子が、よっぱらってたおれていたというわけです。

「まあ、フローネ。」

おかあさんは、びっくりしていいました。

「あなたという人は、まさかブランデーを二たるものんでしまったんじゃないでしょうね。」

「ああ、くるしい。」

フローネは、うめきながら答えました。

「そんなにのんだらしんじゃうわ。ほんのひとしずくなめただけよ。ああ、おかあさんが回っている。せかいじゅうがぐるぐる回っている。」

まだ十さいの女の子ですから、ブランデーをひとしずくなめただけで、せかいじゅうがぐるぐる回って見えるほど、よっぱらったのでしょう。

「あきれた。なんてわるい子だろう。」

おかあさんは、かんかんにおこりました。

しかし、おとうさんは、ゆかいそうにこういっただけでした。

「フローネのむてっぽうにはついわらってしまうよ、みんなが今、生きるか死ぬかのせとぎわにいることもついわすれてね。」

いかだができあがると、これからじょうりくする島がむじん島かもしれないので、くらすのにひつようなものをつみこみました。

食べものとか、いろんなどうぐです。

ロバとニワトリもつれていくことにしました。ロバは、島についてからにもつをはこんでくれるでしょう。

この船には、ほかにもヒツジとかブタとかいろんなどうぶつがのっていましたが、いかだに、それらをみんなのせるわけにはいきません。

さて、すっかりじゅんびができて、いよいよ島をめざしてしゅっぱつというときに、どうしたことか、フローネのすがたがみえません。

どこへいったのでしょう。手分けして船の中をさがしました。

「またブランデーをのんでるんじゃあるまいね。」
といって、おとうさんは、おさけのくらをのぞいてみました。
「くいしんぼうのフローネが、いきそうなところはきまってるさ。」
といって、フランツは船のだいどころをのぞいてみました。
どこにもいません。
おかあさんは、船室をひとつひとつのぞいてみました。やはりいません。さいごにどうぶつのいるくらをのぞいてみました。
いました。
「さあ、うんともってきておくからね、一どにみんな食べないで、毎日少しずつ食べるのよ。あしたからだれももってきてくれないからね。」
フローネは、どうぶつたちにこう話しかけながら、えさをはこんでやっているのでした。
これらのどうぶつは、どうせ船といっしょに海にしずんでしまううんめいにあるのです。

けれども、しずむまでの間だけでも、せめておなかをすかさないですむようにというのが、フローネのおもいやりなのです。

「フローネ。」

おかあさんは、フローネをだきしめていいました。

「あなたはいい子よ、フローネ……。さっきはわるい子だといったけど、ごめんなさい。とりけすわ。」

一家五人とロバとニワトリとをのせて、いかだはしゅっぱつしました。

十メートルほど船をはなれたときです。船のほうでとつぜん犬のはげしくほえる声がしました。

見ると、かたむいたかんぱんの上を、水ぎわのほうへ、一ぴきの犬が、だんがんのようないきおいで走っています。

「ジョンだ！」

と、フランツがさけびました。





「ジョン、ジョン！」

と、フローネもさけびました。

ジョンは、船長がかっていた犬です。フランツやフローネともすっかりなかよしだったのです。

ジョンは水ぎわまでくると、いかだにむかってはげしくほえました。

ワン！　ワン！　ワン！

それは、つれていってくれといっているのです。

「いかだをかえして！　おねがい。」

と、フローネはおとうさんにたのみました。

しかし、いかだをもう一ど船へもどすひつようはありませんでした。

見るまに、ジョンは水にとびこんで、いかだにむかっておよぎはじめたのです。

「ジョン、ジョン！」

「がんばって。」

「もう少しよ。」

「がんばれ、ジョン。」
みんなでおうえんします。
ジョンがいかだにおよぎつくと、フランツがジョンの前足をもって、いかだの上に引き上げてやりました。
「おかしなやつだなあ。いままでどこにかくれてたんだ。」
ほんとうに、ジョンはどこにかくれていたんでしょう。
みんなでいかだをつくったり、いかだににもつをつみこんだりしている間、ぜんぜんすがたを見せなかったのです。
でも、とにかくまにあってよかったです。出てくるのがあと五分もおそかったら、いかだは船から遠くはなれてしまって、だれもジョンに気づかず、そのままおいていってしまったでしょう。
「よかったわ、なかまがひとりふえて。」
と、おかあさんがいいました。
犬をひとりというのもへんですが、犬は一番人間と心の通いあえるどうぶつですか

ら、なかまといってよいでしょう。

いかだは、ひっくりかえることもなく——ひっくりかえったらたいへんですが——めざす島につきました。

さあ、はたしてこの島は、むじん島なのでしょうか。

5 島のたんけん

じょうりくしたあたりには、人がすんでいるようすはありません。

まず、ねるところをつくらなければなりません。

おとうさんとフランツがテントをはりました。ちょうどキャンプをするときのように。

おかあさんは、ごはんつくりです。やはりキャンプのときのように、川の水をつかい、外で火をたくのです。

フローネとジャックは、たきぎあつめです。これもキャンプのときとまったく同じです。

夜になると、おそろしいけだものがくるかもしれないので、テントのそばにたき火をして、その火をたやさないようにしなければなりません。

けだものは火をこわがって、火のあるところには近づかないのです。

おとうさんとフランツが、こうたいでおきていて、きえないように火の番をすることになりました。

夜中になりました。テントの中では、おとうさんとおかあさんとフローネとジャックがねています。

おきて火の番をしているのはフランツです。フランツは銃をかたにかけて、たき火のそばをいったりきたりしています。

じっとうごかないでいると、ねむたくなるからです。

銃は、船のそうこにたくさんしまってあったのを、三ちょういかだにつんでもってきたのです。

テントから少しはなれたところに、ロバがつないでありました。

フランツは、ロバのところまでようすをみにいきました。ロバが、もうじゅうにおそわれるといけないからです。

その時です、フランツはやみのなかに、ロバのほかにもう一ぴき、なにかけだもの

がいるのを見ました。

——いえ、見たといっても、ほうせきのように光っているふたつの目を見ただけなのです。

くらいので、ほかはわかりません。ふたつの目が、光ってうごいていたのです。

「もうじゅうが、ロバをねらってるんだ。」

そう思うと同時に、フランツは、そのもうじゅうらしいものをねらって、銃のひきがねを引いていました。

ダーン！

手ごたえがあって、どたりとたおれる音がしました。

銃の音を聞いて、おとうさんとおかあさんがおきてきました。おとうさんも銃をもち、おかあさんは火のついたまきをもっています。

おかあさんが、まきの火で、たおれているものをてらして、いいました。

「まあ、クマ！」

「いや、クマではない。」

おとうさんが、そのしんでいるけだものをちゅういぶかく見てから、いいました。
「これは、プチクスクスというおとなしいどうぶつだ。めすのようだ。おっぱいが大きいところをみると、子どもがいるにちがいない。気のどくなことをした。」
「まあ、かわいそうに。」
と、おかあさんも、まゆをひそめていいました。
でも、フランツをせめることはできません。
くらくてよくわからなかったのですから。
ロバを、もうじゅうからまもろうと思って、うったのですから。

その夜の明け方のことです。
テントの中でねむっていたおかあさんが、とつぜん、
「キャーッ。」
とさけんで、とびおきました。
そのさけび声で、ほかのものもみんな目をさましました。

見ると、おかあさんのねていたところに、なにかいるではありませんか。
「あら、ネコだわ。」
と、フローネがいいました。
それは、たしかに子ねこぐらいの大きさのものでした。
ネズミの大きらいなおかあさんは、それをネズミだと思って、びっくりして大声をだしたのでした。
しかし、それは、よく見るとネコでもネズミでもありません。
顔がまん丸で、目がくりくりして、フランツがうちころしたどうぶつをそっくり小さくしたものなのです。
そうです。もうおわかりでしょう。
それはプチクスクスのあかんぼうです。
おかあさんをなくして、まいごになり、あたたかそうなテントにもぐりこんできたにちがいないのです。
それは、とてもかわいらしいどうぶつなのです。子ネコよりも、もっともっとかわ

いらしいのです。

「わたし、かおっと。」

「ぼくがかう。」

プチクスクスのあかんぼうは、とうとうフローネとジャックのとりあいになってしまいました。

どちらにしても、おかあさんをなくしたのですから、だれかがそだててやらなければなりません。

つぎの日、おとうさんとフランツは、島のたんけんに出かけました。この島が、どういうところか、しらべるひつようがあるからです。

おかあさんとフローネは、いかだではこんできたにもつのせいりをしました。

ジャックはメルクルにむちゅうです。

メルクルというのは、おかあさんをなくしたプチクスクスのあかんぼうにフローネがつけた名前なのです。

プチクスクスのあかんぼうを見つけた日が水曜日だったので、フランス語の水曜日（メルクルディ）から考えついた名前です。

「目がくるくるしているから、ぴったりだ。」

といって、みんなもメルクルという名前にさんせいしたのです。

そのメルクルが、夜になってから、むずかりだしたのです。それはそれはかなしそうな声を出して鳴くのです。どうも、おなかをすかしているらしいのです。

でも、プチクスクスのあかんぼうはなにを食べるのかわかりません。

もしかしたら、おとうさんが知っているかもしれないのですが、おとうさんはフランツといっしょにたんけんに出かけて、いません。

テントには、おかあさんとフローネとジャックしかいないのです。

「あかちゃんなんだから、ミルクならいいわけよ。」

と、フローネがいいます。

「でも、ここにはミルクなんてないわ。」
と、おかあさんがいいます。
「それがあるのよ。」
「どこに。」
「ヤシの実。ヤシの実にはミルクがはいってるんでしょ。」
そういえば、テントから海岸ぞいに少しあるいたところに、ヤシの林がありました。
「でも、ヤシの実は高いところになってるのよ。」
と、おかあさんが、がっかりしたようにいいます。
「ひとつぐらいおちてるかもしれないわ。」
と、フローネがいいます。
かなしそうに鳴くメルクルがかわいそうなので、夜のくらい中を、おかあさんとフローネとジャックの三人は、ヤシの林へでかけていきました。
すると、どうでしょう。



夜だというのに、ヤシの木にのぼってヤシの実をもいでる人がいるではありませんか。

三人の目の前に、ドサーッとヤシの実がおちてきたので、見あげると、だれかが木にのぼっているのです。

でも、よく見ると、それは人間ではなかったのです。

木のぼりのじょうずなサルでもありません。

月の光でよくよく見ると、なんと、それはカニだったのです。

大きな大きなカニなのです。大きなカニが大きなはさみで、チョキンとヤシの実を切りおとしているのです。

カニは、いくつもいくつもヤシの実をおとします。

「カニさんにわるいけど、ひとつ分けてもらいましょう。」

と、おかあさんが、ひとつひろいあげました。

しかし、かたくてどうしてわったらよいかわかりません。

そこへ、カニが木から下りてきました。

大きなはさみをふりかざしています。おこっているのかもしれません。

あんな大きなはさみでかかってこられては、かないません。

「にげましょう。」

おかあさんはひろったヤシの実をなげすて、フローネとジャックの手をひいて走りだしました。

でも、おなかをすかしてないているメルクルのことを思うと、手ぶらでは帰れません。

三人はまたひきかえして、ものかげから、カニがヤシの実をどうするのか見ていました。

すると、カニはおとしたヤシの実を大きなはさみで、ぱくりとふたつにわっているではありませんか。

つぎつぎとわっていきます。

「そら、いまのうちよ。」

おかあさんとフローネは、ぱっと走り出て、わられたヤシの実の半かけずつをもっ

て、こんどはテントまで走りました。

メルクルはヤシの実のミルクをすって、すっかりきげんがなおりました。

「カニさん、気をわるくしたかしら。」

「きっと、かんかんよ。」

おかあさんとフローネは、そういって大わらいしました。

そのカニはヤシガニといって、ヤシを食べて生きているのです。

6 ジャッカル

たんけんに出かけたおとうさんとフランツは、まだ帰ってきません。三日間のよていで出かけていったのに、三日目の夜になっても帰ってこないのです。

「なにかあったのにちがいないわ。がけからおちて足をくじいて歩けなくなったのかしら。それとも、もうじゅうにおそわれて大けがをして、うごけないでいるのかもしれない。」

おかあさんは、つぎからつぎへとわるいことばかり思いうかべて、しんぱいでたまりません。

「たんけんがおもしろくて、帰るのをわすれてるのよ。」

フローネは、おかあさんをあんしんさせようとしますが、おかあさんのしんぱいは、時間がたつにつれて大きくなるばかりです。

ねむるどころではありません。

そこへさらに、おかあさんを、ますますふあんにさせることがおきました。夜中に、ジョンがとつぜんほえはじめたのです。やみの中の、それも遠くのなにかにむかってほえているのです。

おかあさんとフローネは、テントの外へ出て、耳をすませました。すると、たしかに聞こえるのです。

遠くのほうからですが、犬の遠ぼえのようにいつまでもつづく、きみのわるいなき声が聞こえるのです。

それも一ぴきではなく、なん十ぴきもなん百ぴきもいるような声なのです。

「オオカミよ、きっと。」

と、フローネがいいます。

「こんな南の島にオオカミはいないと思うけれど。」

と、おかあさんがいいます。

さいわい、その夜は遠くのなき声を聞いただけでした。

つぎの日、おかあさんはフローネとジャックに手つだわせて、テントのまわりに、

さくをつくりました。

もし、オオカミのようなもうじゅうのむれがおそってきても、テントまではこないようにです。

その日もとうとう、おとうさんとフランツは帰りませんでした。

そして、その夜、おそろしいことがおきたのです。

ま夜中すぎ、またとつぜんジョンがほえだしたかとおもうと、こんどはほんとうにけだもののむれがおそってきたのです。

それはオオカミではありませんでしたが、オオカミそっくりのジャッカルのむれでした。

見かけがオオカミにそっくりなだけでなく、あらあらしいせいしつもオオカミにおとりません。

さくの外は、そのあらあらしいジャッカルのむれにとりまかれました。

なん十ぴきいるのかなん百ぴきいるのか、くらくてその数はよくわかりませんが、はげしくほえたりうなったりする声から、とてもたくさんいることがわかります。

フローネとジャックは、その声を聞いただけでふるえあがりました。

「こわいよう。」

「こわいよう。」

ふたりは、おかあさんにしがみつきます。

じつは、しがみつかれたおかあさんも、こわくてたまらなかったのです。

「だいじょうぶ。ちゃんとさくをつくってあるでしょ。さくからははいってこないから、あんしんしてなさい。でも、ふたりともテントから出ないのよ。」

おかあさんは、そういうと、銃をとってひとりテントの外に出ました。

ふたりの子どもにはこわくないような顔をして見せましたが、一歩テントの外へでると、銃をもつ手がぶるぶるふるえます。おかあさんは、これまで銃をつかったことがなかったのです。

ジョンが、さくの中から外のジャッカルのむれにむかって、はげしくほえたてています。

ワン、ワン、ワン……



しかし、ジャッカルの大ぐんは、イヌの一ぴきぐらいなんとも思っていないようです。

はげしくさくにおそいかかってきます。

どすんとさくに体当たりしてくるのがいます。

さくのぼうに食らいついて、はげしくゆさぶるのがいます。

さくに前足をかけて、はいあがろうとするのがいます。

とびあがって、さくをこえようとするのがいます。

さくが高いので、こえることはできず、さくのとちゅうにぶつかってはころがりおちます。

しかし、なかなかあきらめません。遠くから走ってきて、いきおいをつけて、とびこえようとします。

それをなんどもくりかえします。だんだん高くとぶようになります。とうとう頭だけはさくの上にとどくようになりました。

それを見たとき、おかあさんは、

「ああ、もうだめだ。わたしたちはみんな、ここでジャッカルに食いころされてしまうのだわ」

と思いました。

たとえ銃でうってみても、つぎつぎとはいってこられたら、ぜんぶうちころせるものではありません。

銃をもっているのはおかあさんたったひとり。ジャッカルはなん十ぴきなん百ぴきといるのです。

さくをこえてはいってこられたら、とてもかないっこありません。

その時、おかあさんにひとつの考えがうかびました。時間をかけてもちこたえるほうほうを思いついたのです。

ジャッカルは、オオカミもそうですが、夜くらいときにおそってきます。そして、夜が明けるとひきあげていくせいしつをもっています。朝までなんとかがんばればよいわけです。

おかあさんはテントの中にもどると、五わいるニワトリの一わをつかまえました。

そして、もうふにくるまってふるえているフローネとジャックにいいました。
「けっして外をのぞいてはいけませんよ。」
これから、おかあさんがしようとしていることは、子どもには見せたくないことだったのです。
おかあさんは、ニワトリをだいてテントの外に出ました。
そして、ジャッカルがもう少しでさくをとびこえそうになったとき、ニワトリをさくの外へなげました。
ニワトリは、少しはとぶことができます。
でも、あまり高くはとべません。それに夜は目が見えません。
やみくもにただまっすぐ、とんだり走ったりしながら、しにものぐるいでにげていきます。
それを、ジャッカルがいっせいにおいかけます。さくの中の人間のことはわすれて、
ニワトリをおいかけます。
やがて、目の見えないニワトリはジャッカルにつかまります。ジャッカルは、よっ

てたかって、たちまちのうちにニワトリを食べてしまいました。

それからまた、さくにむかっておそってきます。さくに体当たりをくりかえします。

さくのぼうにくらいついてゆさぶります。

さくをはいのぼろうとします。さくをとびこえようとします。

すると、おかあさんは、またニワトリをさくの外になげます。

すると、またジャッカルのむれは、さくの中の人間のことはわすれて、いっせいにニワトリをおそいます。

こんなことは、おかあさんもしたくはなかったのです。ニワトリをジャッカルのえじきにするなんて、見るのもつらいことです。

それを自分でするのは、なおつらいことです。

でも、おかあさんは、ふたりの子どもをジャッカルからまもるために、それしかほうほうがなかったのです。

おかあさんは、ニワトリをジャッカルのむれの中になげるとき、

「ゆるして。」

と、心の中でニワトリにいいました。
そして、ジャッカルのむれがニワトリをおそっているあいだ、しゃがんで顔をおおっていました。
こうして、おかあさんは、五わいたニワトリを、のこらずジャッカルのえじきにしてしまいました。
それで、だいぶ時間がたちましたが、まだ夜明けにはなりません。
「ああ、どうしよう。もうジャッカルをふせぐほうほうがない。こんどこそ、もうだめ。」
おかあさんは、また生きるのぞみがたたれてしまいました。
なん十ぴきなん百ぴきといるジャッカルは、たった五わのニワトリでまんぞくするはずはありません。力をゆるめることなく、さくにおそいかかってきます。
ついに、ジャッカルの一ぴきが高くとびあがって、さくの上に前足をかけました。
「ああ、はいってくる。」
と思ったしゅんかん、おかあさんは銃のひきがねを引いていました。

ダーン！

さくの上のジャッカルは、ころりとさくの下へおちてうごかなくなりました。同時におかあさんのほうも、ふらふらとたおれてうごかなくなりました。

おかあさんは、生まれてはじめて銃をうったので、その音とショックで気をうしなってしまったのです。

でも、うんよく、そのときは夜は明けはじめていました。ジャッカルのむれは、まるで銃の音が合図のように、いっせいに山のほうへひきあげていきました。

7 木のおばけ

おとうさんとフランツが、よていより帰りがおそくなったのは、もうじゅうにおそわれたからでも、がけからおちたからでもありませんでした。しかし、さいなんにあったからであることはちがいありません。

帰り道に、広いそこなしぬまがあって、ふたりとも、うっかりそこへふみこんでしまったのです。

そこなしぬまは、どろのぬまで、水の上には草が生えているので、草原と見分けがつかないのです。

そして、一どそこへふみこむと、人間でも、どうぶつでも、とてもはいあがることができないのです。

どろの中は、水の中のようにおよぐことができませんから、もがけばもがくほど、ずるずるとしずんでいってしまうからです。

おとうさんとフランツは、とちゅうでみつけたサトウキビをせおっていたので、サトウキビがうきになって、むねまでしかしずまず、それでなんとかはいあがることができたのです。

でも、はいあがるだけでもひとくろうで、ずいぶん時間がかかりました。それから、そこなしぬまがどこまでつづいているかわからないので、回り道をしなければならなくなったのです。

それで、よていどおりに帰ることができなかったのです。

おとうさんとフランツは、テントのそばまで帰ってきて、血のついたニワトリのはねが、そこらじゅうにおちているのにびっくりしました。

つぎに、出かけるときにはなかったさくがあるのにおどろきました。

そして、そのさくのそばに、ジャッカルが一ぴきしんでいるのをみつけて、もっとおどろきました。

でも、おどろきはそれだけではまだすまなかったのです。

さくの中へはいって、もっともっとおどろきました。なぜなら、そこにおかあさん

がたおれていたからです。
そして、そばには銃がおちています。
おとうさんもフランツも、てっきりおかあさんは、しんでたおれているのだと思ったそうです。
でも、
「アンナ、アンナ」
と、おとうさんが、おかあさんの名をよんでだきおこすと、おかあさんは、ぱっちりと目をあけて、こういいました。
「まあ、あなた。いつお帰りになったんです」
そこへ、おとうさんの声を聞いて、テントの中からフローネとジャックがとび出してきました。
こうして、五人のかぞくが、ふたたび、ぶじにあえたのでした。
たんけんから帰ったおとうさんとフランツの話では、どこにも人間のいるようすは

なかったそうです。やはり、むじん島なのです。

たんけんにでかけたさいしょの夜、おとうさんとフランツも、ジャッカルのむれに出あったそうです。

でも、ふたりは木のえだの上に、鳥のすのようなねどこをつくって、その上にねていたので、おそわれずにすんだのです。

そこで、夜は、ジャッカルがおそってきてもだいじょうぶなように、木の上に家をつくって、その中にねるのが一番よいということになりました。

みなさんは、きっと、木の上にどうやって家をつくるのかな、とへんに思うでしょうね。

鳥のすのような家ならつくれるでしょうが、かぞく五人が楽らくねられるような、人間の家らしい家を、どうして木の上につくったりできるでしょう。

ところが、この島には、高いところに家をつくるのにぴったりの、おあつらえむきの木があったのです。

それは、なんという木か、だれも名前を知りません。もの知りのおとうさんでさえ

知りません。

スイスでは、見たことも、話に聞いたこともない木なのです。

それは、どんな木かというと、そうですね、「木のおばけ」といったらぴったりするような、そのほかにはいいようのない、とってもかわった、おかしな、そして、はじめて見るときは、きみがわるいような、こわいような、ほんとうにおばけのような木なのです

その木は、一本の木なのに、みきが十本にも二十本にも分かれているのです。

「分かれているのは、みきではなくて、えだなんだ。」

と、みなさんはいうでしょう。

ところが、この木は、ほんとうにみきが分かれているのです。

いい方をかえてせつめいしますと、この木は、土のところでは十本にも二十本にも分かれて生えているみきが、とちゅうでくっつきあって一本になっているのです。そして、そこから上では、またなん十本にも分かれてのびているのです。

上のほうのは、えだといってもいいでしょう。でも、下のほうは、いくら分かれて

いても、えだとはいえません。

それは分かれて土へもぐっていっているのですから、根といったらいいかもしれません。

でも、根がそんな上から生えているというのもおかしなことです。

根のようなみき、というのが一番当たっているでしょう。

とにかく、そんなへんな木なのです。

そのおばけのような木の、なん本ものみきがくっついて一本になっているところから上のえだを少しきりはらえば、その上に五人がはいれるくらいの家ができそうなのです。

おとうさんとフランツが、そこに家をつくりにかかりました。

ざいりょうは、いかだです。いかだをばらばらにして、木の上にはこびあげるのが大しごとです。

なん日もかかります。

おとうさんとフランツが木の上の家づくりにいっしょうけんめいになっているあいだ、こんどは、おかあさんとフローネとジャックがたんけんにでかけました。たんけんといっても、おとうさんとフランツのように、なん日もとまりがけでいくのではありません。

一日でいってもどってこられる、近いところへいくのです。

ピクニックといってもいいようなものなのですが、近くても、まだだれも人間のいったことがない未知の土地へいくのですから、やっぱりたんけんです。

おかあさんは、はたけになりそうなところをさがすのがもくてきです。フローネとジャックは、おもしろいあそびばをみつけるのがもくてきです。

おかをひとつこえると、あまり石ころのない、はたけになりそうな、たいらな土地がありました。

「ここがいいわ。ここをたがやして、はたけをつくりましょう。カボチャやトウモロコシを。」

おかあさんは、すっかり気にいったようです。

おかあさんは、オーストラリアへいったらやさいばたけをつくるつもりで、いろんなやさいのたねを、にもつにいれてもってきていたのです。

このたいらな土地の近くに森が見えました。フローネとジャックは、そっちへいきたくてしかたがありません。

「早く、あっちへいこうよ。」

フローネとジャックは、おかあさんを森のほうへせきたてます。

森の入り口に、赤いうつくしい花がさいていました。南洋の島にはあまりたくさんのしゅるいの花はないようですが、そのかわり、どの花も、目のさめるようなあざやかな色をしています。

三人は、むちゅうで花をつみました。

それから、つんだ花で、首にかける花わや、頭にのせる花のかんむりをつくりました。

「ああ、おなかすいた。」

と、フローネがいいます。





いつでも、まっさきにおなかがすくのはフローネなのです。
「そろそろおひるにしましょうか。」
と、おかあさんがいったときです。
「あっ。」
と、フローネがさけびました。
おべんとうのつつみが、おいたところにないのです。
森の中で、ガサゴソ音がします。
見ると、一ぴきのサルが、おべんとうのつつみをもっていくところなのです。
「こら!」
フローネはすぐおいかけました。
でも、手おくれでした。サルは、するすると木にのぼりました。
木の上には、ほかになんびきもサルがいて、おべんとうのつつみは、つぎつぎとサルの手から手へ、あるいは手から足へ、さらには足からしっぽへとわたされ、そのサルたちがまた、えだからえだへととびうつって、見るまにおべんとうのつつみはどこ

かへきえてしまったのです。

「こら、おべんとうをかえせ！」

と、ジャックもさけびましたが、むだでした。

三人は、おべんとうがなくなったと知ると、なんだかよけいにおなかがへったようにかんじました。

「どうしよう。帰る元気もないわ。」

と、フローネがなさけない声を出します。

「おなかすいたよう。」

と、ジャックはいまにもなきだしそうな声を出します。

この時、おかあさんが、おどろいた声をあげました。

「まあ、メルクル！」

メルクルが、なにか食べているのです。

メルクルは、いつもジャックにだかれたり、かたにのったりして、ジャックにくっついているのですが、三人が花をつんでいる間、ジャックからはなれて、そのへんを

ひとりでとび回っていたのです。

そのメルクルが、なにかりょう手にかかえて、おいしそうに食べているのです。よく見ると、それはパパイヤです。

「まあ、パパイヤだわ。」

「きっと、この近くになってるのよ。」

三人が近くをさがすと、パパイヤは、すぐみつかりました。

それも、あるわあるわ、三人がいくら食べても食べても食べきれないほど、なってるではありませんか。

おかげで三人は、おべんとうをサルにとられてしまっても、ひもじいおもいをしないですんだのでした。

8　おにいちゃんがあぶない

家をつくったり、やさいをつくるはたけをさがしたりはしましたが、それは先ざきの用心のためで、おとうさんもおかあさんも、この島にずっとすみつくことにきめたわけではありません。

一生むじん島でくらすために、すみなれた国を出てきたのではありません。早くもくてき地のオーストラリアへいかなければなりません。

そのためには、島の近くを船が通るのをまって、のせてもらわなければなりません。そして、のせてもらうためには、船の人が気づいてくれるように、船が見えたら合図をしなければなりません。

そこで、海からよく見えるおかの上に、みんなでまきをはこびました。船が通るのが見えたら、いつでもすぐ火をたけるようにするためです。

船の人が、島にけむりがたちのぼっているのを見れば、島に人間がいるとわかるか

らです。

それから、おかの上に、はたも立てました。

火をたくのがまにあわなくても、はたを見て、気がついてくれるかもしれないからです。

一日になん回もおかの上にのぼって海を見わたすのが、フランツとフローネのやくめになりました。

しかし、くる日もくる日も、さっぱり船はすがたをあらわしません。海はどこまでも青一色で、船らしい黒いものも白いものも見えません。

船がなかなかこないとなると、しばらくは島でくらすかくごをしなければなりません。

木の上の家はできあがりましたが、いかだではこんできたしょくりょうがだんだんとぼしくなってきました。

チーズはすぐに食べてしまいました。ほしにくもなくなりました。

ほしにくがなくなったら、ころして食べるつもりだったニワトリは、ジャッカルのえじきになってしまいました。

ヤシやパパイヤのみはいくらでもあります。しぜんになっているのを、ただとってくればよいのですから、かんたんです。

でも、いしゃのおとうさんはいうのです。

「毎日、そんなものばかり食べていては、えいようがかたよって、びょうきにかかりやすくなる。」

そこで、おとうさんとフランツは、しんせんなにくが食べられるように、かりに出かけることにしました。

もちろん、ジョンがおともします。

もうひとり、おともするといってきかないものがいました。フローネです。

「女の子は、かりになんかいくものじゃありません。」

と、おかあさんがいいましたが、フローネはまけていません。

「おかあさんだって、ジャッカルをうったじゃないの。わたしだって、いつ銃をうた

なければならない時があるかわからないわ。そのれんしゅうよ。」

これには、おかあさんもかえすことばがありません。ジャッカルにおそわれたあの夜、フローネがフランツのように銃をうつことができたらと、おかあさんは思ったからです。

「そんなにきたかったら、ついてくるさ。」

と、おとうさんがいいました。

ゆるしがでたのです。

「ぼくもいく。」

と、ジャックもいいだしましたが、これは、おとうさんもおかあさんもゆるしません。

三人はそれぞれ銃をもってでかけました。ジョンがいさんで先をいきます。

森では、サルと小鳥しか見かけませんでした。

「ウサギかヤマドリでもいるといいんだが。」

と、おとうさんがいいました。

「ぼくはイノシシをしとめたいな。」

と、フランツがいいました。

「わたし、サルにしかえしをしてやりたいわ。このあいだ、おべんとうをとられてしまったの。」

と、フローネがいいました。

するとおとうさんが、きびしい顔をしていいました。

「サルなんかうつんじゃない。」

フローネも、サルをころしたいとは思いません。ただちょっと、むねのすくようなしかえしをしたいと思っただけなのです。

「エイ！」

フローネは小石をひろって、木の上のサルになげつけるだけでがまんしました。それも、当たらないように、わざとまとをはずしてなげたのでした。

すると、どうでしょう。

サルのむれは、おどろいてぱっとにげちるかと思うと、そうはしないで、ぎゃくに

三人にむかって、いっせいに石をなげかえしてきたのです。
「いててて。」
三人は、あわてて、しゃがんで頭をかかえました。
「フローネが、よけいなことをするからだ。」
と、フランツがおこっていいました。
それにしても、木の上のサルが、どうして石をもっていたのでしょう。じつは、それは石ではなかったのです。
ばらばらとおちてくるものを、おとうさんがひとつひろって見て、いいました。
「おや、これはココヤシの実だ。」
サルのむれがのぼっていた木は、ココヤシの木だったのです。
「しめしめ。『たなからぼたもち』とは、このことだ。」
と、こんどはおどりあがってフランツがいいました。
「ハハハ。これがサルまねだ。」
と、おとうさんがわらっていいました。

サルたちは、フローネが小石をなげたのを見て、まねしてココヤシの実をもいで、なげかえしたのです。
おかげで、三人は少しいたい目にあいましたが、なにもしないで、たくさんのココヤシの実を手にいれることができたのでした。
これでフローネは、思わぬよいことに、むねがすっとしたのでした。
そして、もうサルをにくいとは思わなくなりました。友だちになってもいいと思ったくらいです。

森をぬけると、草ぼうぼうの野原に出ました。人間のせいよりも高い草が、あたりいっぱいに生えています。
「なにかいそうだな。」
と、おとうさんがいいます。
ジョンが、まっさきに草に分け入ります。
「ジョン、まて。」

フランツとフローネがおってていきます。ジョンの足が早いので、ふたりも走るようにおいかけます。

「うっかりふみこむんじゃない。」

と、うしろから、おとうさんがいいます。

しかし、ふたりにはもうその声がとどきません。ジョンについて、どんどんすすみます。

おとうさんは、また、そこなしぬまにでもふみこんだらたいへんだと思ったのですが、ここにはそこなしぬまはないかわりに、べつのきけんがまちうけていたのでした。

ジョンが、なにかをかぎつけて、ワンワンとほえたときは、もう手おくれでした。

ジョンのほえる声におどろいて、ふかい草の中にねそべっていた水牛が、ぬっと立ちあがったのです。

そして、それは一頭や二頭ではありません。むれをつくっていたのです。

「あっ。」

と、フランツがさけんだときは、フランツもフローネも水牛のむれの中にいたのです。

しかも、おとうさんは、遠くにいるのです。

「おとうさん！」

と、フローネは、ふるえる声でさけびました。

「フローネ！」

おとうさんの声がかえってきますが、大きな水牛にへだてられてすがたは見えません。

「フローネ、うごくんじゃない。じっとしてるんだ。」

と、フランツがいいます。

ふたりが水牛をおこらせないよう、なにもしないでじっとしていれば、水牛のむれはやがてゆっくり歩きさるだろう、とフランツは思ったのです。

しかし、いつでも銃をうてるようにかまえています。

フローネのほうは銃をかまえるどころではありません。

あまりのおそろしさに、銃をとりおとしたことにも気づかず、ただ、がたがたとふるえています。

水牛はふたりを見ても、見えないような、知らん顔をしています。
一歩前へ出たり、一歩うしろへさがったり、のろのろとうごいています。
そのまま長い時間がたったようにふたりは思いました。しかし、しずかだったのは、ほんのいっしゅんだけだったのです。
ワン、ワン、ワン！
ジョンがまたほえました。そして、むてっぽうにも、ジョンは水牛の一頭にとびかかったのです。
これではたまりません。おこった水牛は、かかってきたジョンではなく、一番体の大きいフランツめがけてとっしんしてきました。
フランツはひきがねを引きました。
ダーン！
この音で、ほかの水牛はいっせいににげちりましたが、おこった水牛は、少しもひるまず、フランツのすぐはなさきにせまってきます。
たまがはずれたのです。さあ、たいへん……。



9 船(ふね)が見(み)える

「おにいちゃん、にげて!」

というフローネの声(こえ)をきくより早(はや)く、フランツは、銃(じゅう)をすててかけだそうとしました。でも、なんということでしょう。

「あっ。」

フランツは、自分(じぶん)ですてた銃(じゅう)につまずいたのです。一歩(ほ)もにげないうちにころんでしまったのです。

ですが、これまた、なんということでしょう。つまずいてころんだのがよかったのです。

フランツのむねをめがけてつっこんできた水牛(すいぎゅう)は、フランツがたおれたために、いきおいあまって、フランツのたおれた上(うえ)をとびこえてしまったのです。

そして、そのしゅんかん、

ダーン！

と、銃声がひびきました。おとうさんがうったのです。

はじめの銃声でほかの水牛がにげちったので、フランツをおそっている水牛がおとうさんにも見えたのです。

フランツの上をとびこえた水牛は、フランツの頭から二メートルも先にどさりとおちて、そのままうごきません。

おとうさんが、きゅうしょに一発で当てたのです。

「わあ、おとうさん、すごい。」

フローネは、おどりあがりました。ばんざいとさけびたいくらいでした。

おにいちゃんがたすかったばかりでなく、三人がかりでもとうていもちはこべない、大きなえものをしとめたのですから。

三人は、水牛のにくの一番やわらかくおいしそうなところを、もてるだけもって、元気よく、かちほこって家に帰りました。

そのばんは、みんなが大きなステーキにありつけたことはいうまでもありません。

そして、のこったにくは、長もちするようにおかあさんがしおづけにしました。

かりは、おわってみれば大せいこうでしたが、いいことばかりだったわけではありません。

よく日、フランツは足がいたいといいだし、歩けなくなったのです。

水牛におそわれてあわててころんだとき、足首をどうかしたらしいのです。

そのときは、こうふんしていたためか、いたいとかんじなかったのですが、一日たつと、赤くはれあがって、かた足で立つことはできますが、いたいほうの足はじめんにつけることもできないくらいです。

すぐに、おとうさんが手当てをしました。

「なに、くじいただけだ。三日もすればもとどおりになる。」

と、おとうさんはいいました。

でも、かぞくがひとりでもうごかないでねているというのは、なんとなくゆううつなものです。

このむじん島では、ほかに人がいないのですから、なおさらです。
「ああ、つまんないなあ。」
フローネが、ふるさとの町ベルンを出てから、はじめてぼやきました。
こんなときは、ふるさとがこいしくなります。ホームシックです。
ここにはともだちもいなければ、学校もない。図書館もない。げきじょうもない。店屋もない。なんにもない……。
フローネは、なにもする気がしません。
おとうさんとおかあさんは、おかの下のたいらなところで草や木に火をつけてやいています。
たがやしてはたけにしたいと、おかあさんがいっていたところです。
たがやすどうぐがないので、生えている草や小さな木をやいて、そのあとにぼうであなをあけて、やさいのたねをまくのだそうです。
「やけた草や木のはいがこやしになって、やさいがそだつ。大むかしののうぎょうのやりかただ。」

と、もの知りのおとうさんがいいます。

「どんなさくもつができるか見ものだわ。」

と、フローネは手つだいもしないで、つい、にくまれ口をききます。

ホームシックで、ごきげんがわるいのです。

「見はり台へのぼって見なさい、ジャックをつれて。」

と、おかあさんがいいます。

見はり台というのは、船が通るのが見えたら火をたくよういをしてある、おかの上のことです。

そういえば、きょうは、フランツがねているので、まだ見はり台へ一どもあがって見ていないのでした。

「どうせ、むだよ。船なんかきやしないわ。」

と、またフローネは、にくまれ口をききます。

「とにかくあがってみなさい。みはり台の上は、そよ風がふいてきもちがいいよ。」

と、おとうさんがいいます。

「ジャック、おいで。」
フローネは、しぶしぶジャックをつれておかにのぼりました。
すると、どうでしょう。
「あっ。」
フローネは、おもわずとびあがりました。
遠くの海に船らしいものが見えるのです。
「ジャック、まってるのよ。」
というと、フローネは、ころがるようにおかをかけおりました。
「おとうさん、船が、船が……早く……」
フローネは、みなまでいわず、また、おかをかけのぼります。
「なに、船。」
「ほんと、フローネ。」
おとうさんとおかあさんも、とぶようにおかにのぼります。
「ほんとだ。船だ。」

「まあ、やっと帰れるのね。」

船は、だんだん近づいてきます。

「さあ、火をたきましょう。」

「下で草をやいていてよかった。うまいことけむりがたっている。しかし、ここでも火をたこう。」

さっそく、まきに火をつけました。

「さあ、はたもふるんだ。」

フローネは立ててあるはたをぬいて、うちふります。

「銃をとってきて、空にむけてうってみよう。音で気がついてくれるかもしれない。」

おとうさんは、銃をとりにもどりました。

すると、どうでしょう。足のいたいフランツまでが、船が見えるときいて、おとうさんのあとをおってくるではありませんか。

かた足でぴょんぴょんとんだり、りょう手をついてはったりしながら。

一家五人ぜんいんがおかの上に立って、船にむかってさけびました。

「おーい！」
「おーい！」
「ここだ！」
「ここよ！」
「早くきて！」
フローネとフランツが、ふたりがかりではたをふります。
おかあさんは、火にどんどんまきをくべます。
おとうさんは、空にむけて銃をうちます。
しかし、なんということでしょう。
船は、たしかに近づいてくるところだったのに、もういちどよく見ると、ぎゃくに遠ざかっていくではありませんか。
つまり、船は東のほうからあらわれて、島のおきを通って、こんどは西のほうへさっていくのです。
島のおかの上で火がたかれているのも、人がはたをふっているのも、銃をうってい

るのも、気づかずに。
「おーい！」
「おーい！」
「まって！」
「こっちだ！」
「もどって！」
五人がよべどさけべど、船は、かなしいことに、ますます遠ざかっていきます。そして、やがて黒い点のように小さくなってしまいました。
「ああ、いってしまった。」
フローネが、まずそのばにへたりこんで、なきだしました。
「どうして気がついてくれないんだろう。」
フランツも、わすれていた足のいたみがきゅうにもどってきたように、そのばにすわりこんでしまいました。
「あいにく、だれもこちらを見ていなかったのかねえ。」



と、おとうさんも、あきらめきれないようにいいます。
「見てなくても、音は聞こえたはずよ。」
と、フローネが、おこったようにいいます。
「いや、音がはねかえるものがない海の上では、銃の音も、あんがいとどかないのかもしれない。」
と、こんどはおとうさんも、すっかりあきらめたようにいいます。
「そんなにがっかりしないで。」
おかあさんだけが、元気にみんなをはげましていいます。
「船はまたくるわ。これで、船の通る道が島からそんなにはなれていないってことがわかったんですもの。のぞみがでてきたわけよ。」
「そうだ。」
おとうさんが、気をとりなおしていいました。
「おかあさんのいうとおりだ。きぼうをもつこと、それがたいせつだ。このつぎは気がついてくれるさ。いまのは、オーストラリアからヨーロッパへ帰る船だろう。この

つぎは、ヨーロッパからオーストラリアへいく船が通るにちがいない。それにのせてもらうほうがいいよ。」

これは、まけおしみでした。

みんなが、がっかりしたことに、かわりはなかったのです。

10　おにいちゃんのひみつ

このごろ、フランツは朝ごはんがすむと、ふらりとどこかへ出かけていきます。

「フランツ、どこへいくの。」

と、おかあさんがきくと、

「うん、その、ちょっと……」

と、いいかげんなへんじをします。

「『ちょっと』が、お昼まで帰ってこないじゃないの。お昼がすめば、また『ちょっと』なんでしょう。」

「うん、そう、ちょっとなんだよ。」

いったい、なにがちょっとなのか、さっぱりわかりません。

フローネは、気になってしかたがありません。で、ある朝、フランツが出かけていくのを、あとからこっそりつけていきました。

ところが、いくらもいかないうちに、かんたんにまかれてしまいました。

フランツは森へはいっていったのですが、大きな木のかげになったとおもったら、それきりすがたが見えなくなったのです。

フランツは、気がつかないふりをしていましたが、ほんとうは、ちゅういぶかくうしろに気をつけていて、フローネがつけていることを知っていたのです。

それで、大きな木のそばにくると、すーっとその木のかげにはいり、フローネがその木までくるまえに、もうつぎの木のかげにうつり、そしてフローネがうろうろしているあいだに、またつぎの木のかげへ、そのまたつぎの木のかげへと、つぎからつぎと木のかげにかくれながら、フローネがさがしているのとははんたいのほうに走りさっていたのです。

「やっぱり、なにかかくしてる。おにいちゃんにはひみつがあるんだ。」

そうひとりごとをいいながら、フローネは、むなしくひきかえすよりほかありませんでした。

フランツときたら、ほんとうにひみつずきなのです。

木の上に家をつくったときも、そうでした。

木の家ができあがると、そこからなわばしごを下げて、のぼりおりするようにしたのですが、夜、みんながあがってしまうと、そのなわばしごを上へひきあげてしまいます。

みんながねむっているとき、だれも（といっても、この島には、ほかにはどうぶつしかいないのですが）あがってこられないようにするためです。

そして、朝になってまた外へ出るときは、なわばしごを下げます。つまり、そのなわばしごがないと、だれも木の上の家に出入りできないのです。

ところが、フランツときたら、手じなみたいに、なわばしごをつかわないで、たったいま木の下にいたとおもったのに、あっというまに上の家にあらわれ、またぎゃくに、たったいま上の家にいたとおもったら、あっというまに家の下のじめんにおり立っているのです。

「まあ、フランツ、あなた、はねがあるの。」

おかあさんは、しんじられないという顔をしました。
「木のみきをのぼれるわけはないし……」
フローネも、首をかしげるばかりです。
家をつくるまえに、上のえだを切りはらうため、おとうさんとフランツが、まずはじめに木の上にあがった時でした。
みきをのぼることはできなくて、ロープのはしに石をつけて、それをなげあげてえだに通し、そのロープにぶらさがって、木の上にあがったのです。
今ではそのロープもありませんから、フランツはまほうつかいとしか思えませんでした。
ところが、おとうさんだけは、少しもおどろかないで、にやにやしているのです。
そして、いいました。
「フランツ、そろそろたね明かしをしてはどうかね。ひみつをフローネにさがし当てられたら、くやしいだろう。」
「ハハハ。教えてやるか。」

そういうと、フランツは、家の床の下になっている大きな木のみきの根元をあけたのです。

木の根元をあけるというのは、ちょっとおかしいでしょう。あけるのはドアとかふたです。

そうです。この木のみきの根元が、ドアになっていたのです。

そして、そのみきの中は、大きなパイプのようにがらんどうになっているのです。

さらに、その中に、木のはしごがとりつけてあったのです。

おとうさんとフランツは、おかあさんとフローネとジャックが近くをたんけんして歩いているあいだに、木の上に家をつくりながら、そんなさいくをしていたのです。

もっとも、みきの中は、しぜんにくさってつつになっていたので、おとうさんとフランツがしたのは、中に木のはしごをつくってとりつけるのと、根元を四角に切りぬいて、ドアにすることだけだったのですが……。

そして、おかあさんやフローネをおどろかしてやろうと、しばらくこのしかけをだまっていようといいだしたのは、フランツだったのです。

そんなフランツのことですから、またなにか、みんなをおどろかすことをたくらんでいるにちがいありません。
おとうさんだけは、うすうすそれを知っているらしい。だから、フランツがふらりと出かけて、ごはんどきまで帰ってこなくても、しかりもしなければ、どこへいったと、ききもしないのです。
それでフローネはなおさら、そのひみつが知りたくてたまりません。
それが、とうとうわかったのです。
フローネがひとりで見はり台へのぼって、船が通らないかと海のほうをながめていたときです――。
このごろフランツは、みんなにかくれて「ひみつ」にねっちゅうしていて、見はりのやくをなまけるので、フローネひとりで見はり台へいくのです。
すると、船は見えませんでしたが、森から海がんのほうへ、なにか木でつくったほそ長いものがうごいていくのが見えたのです。
それは、前もうしろもとがっていて、足があるわけでも、車がついているわけでも

ないのに、ひとりでにうごいていくのです。
いいえ、はじめはそう見えたのですが、よくちゅういして見ると、まん中へんに二本の足があって、それで歩いてうごいているのでした。
はじめ足がないように見えたのは、高いところから見ているので、そのほそ長いものの下になっている足が、よく見えなかったからなのです。フローネは、
「おや、おかしなものだなあ。」
と、思いながら、なおよくよくちゅういして見ると、そのほそ長いものの下にあるのは、二本の足だけではなくて、ちゃんと体も頭もある人間でした。
つまり、ひとりの人間が、せなかをうんとまげて、その上に、木でつくったほそ長いものをのせてはこんでいるのです。
「なあんだ、おにいちゃんじゃない。」
フローネは、思わず声に出していました。
「わかった。なんだか知らないけど、あれがひみつなんだわ。」
フローネは、いそいで見はり台をおりると、おにいちゃんのあとをおいました。

こんどは、まかれるしんぱいはありません。むこうは大きなおもいにもつをせおっているのですから。

「あれ、きっと森の中でこっそりつくっていたんだわ。海へもっていくとすると、たいてい見当がつくわ。」

そう思いながら、フローネはフランツをつけていきました。

フランツが海について水の上にうかべたのを見ると、思ったとおり、それはボートでした。ボートといっても、フローネがこれまでに見たのとはちがっています。前とうしろはとがらせてありますが、人間ののるところだけあながあいていて、あとはふさいである、ずいぶんかわった形のボートです。

そして、あなはふたつあいていて、どうやらふたりのりらしいのです。

フローネは、フランツに気づかれないように、いわのかげからのぞいて見ていたのですが、ふたりのりとわかると、もうじっとしていられません。いわかげから走り出ると、大きな声でさけんでいました。

「見ちゃった！　見ちゃった！」

フランツは、フローネがきゅうにあらわれたのを見ると、いっしゅん、おこったようにまゆをつりあげましたが、もうかくしきれないと思ったのでしょう、

「しようがない。フローネものせてやるよ。」

と、いいました。

フランツは、フローネをうしろのせきにのせると、一本で右にも左にもこげるかいでこぎはじめました。

「まあ、なんてすてき。」

と、フローネは、心に思ったのですが、口では、

「風がわりなボートね。」

といいました。

「そうさ。カヤックだもの。」

と、フランツは答えました。

カヤックというのは、グリーンランド人のボートだそうですが、フランツは、どこでそんなかわったボートのつくり方をならったのでしょう。



「きっと、おとうさんにこっそり教えてもらったにきまっているわ。」
と、フローネは思いましたが、それは口に出しませんでした。
おにいちゃんのプライドをきずつけてはいけないと思ったからです。

11　どうくつの家

フランツのつくったカヤックは、小回りがよくでき、きしに近い、いわといわの間を走ったり、なみのしずかなわんの中で、ちょっとした魚とりをするには、とてもべんりでした。

フランツは、フローネとジャックをかわるがわるカヤックにのせて、サンゴしょうにむらがっているうつくしいねったい魚をのぞかせたり、水の中のいわについている貝をとってくれたり、いっしょにつりをしたりして、楽しませてくれました。

しかし、カヤックでは、なみのあらい外海へのり出していくことはできません。それに、のれるのはたったふたりです。かぞく五人みんながのって、島から出ていくというわけにはいきません。

おとうさんが、このカヤックを見て、ためいきをついていいました。

「船がつくれたらなあ……」

ふたりのりのボートではなく、人間五人のほかになん十日分もの食べものをつんで、なみのあらい外海へのりだしてもひっくりかえらないような、大きな船をつくることができたら、オーストラリアまでいけるでしょう。

たとえオーストラリアまではいけなくても、人のすんでいる島へ、いきつくことができるでしょう。

「木はたくさんあるのにね。」

と、おかあさんがいいます。

「そう。しかし、どうぐはあるが、つくり方を知らない。」

と、おとうさんがいいます。

もの知りのおとうさんも、大きな船のつくり方までは知らないのです。

むじん島ぐらしは、いったい、いつまでつづくのでしょう。

わるいことに、雨のきせつがやってきました。くる日もくる日も雨です。

雨ふりで一番こまったのは、家の雨もりです。木の上の家のやねは、木のかわや草

でつくってあるので、なん日も雨がつづくと、くさってあながあいたり、あなはあかなくても、水がしみて、ぽたぽたおちてくるのです。

といって、またテントの家にもどるわけにもいきません。

テントだって、長雨では雨もりがするし、じめんからも雨水がながれこみます。

雨がふりだしてから、ジョンのすがたが見えなくなりました。

家のある木の根のそばに、ジョンのこやがつくってあって、ジョンはそこでねていたのですが、雨がなん日もつづくようになると、おかあさんがえさをやる時間にはそこにもどってきますが、そのほかの時は、どこへいっているのか、こやは、あき家になっています。

きっと、ジョンのこやも雨びたしでいごこちがわるく、もっといごこちのよいところをみつけたにちがいありません。

「そんないごこちがよいところがあるなら、わたしもいきたいわ。」

そう思って、フローネは、ジョンが、えさを食べてから帰っていくところへ、ついていくことにしました。

ジョンは山のほうへいきます。まるで、とてもかよいなれた道をいくように、わきめもふらず、すたすたと小走りにいきます。
「ジョン、そんなに早く走らないで。」
と、フローネはうしろから声をかけました。
するとジョンはフローネのことばがわかったのか、ゆっくり歩きはじめます。おにいちゃんのように、フローネをまいたりしません。かえって、つれができたのをよろこぶように、フローネをふりかえりふりかえりして、フローネがおくれると、立ちどまってまってくれさえします。
大きないわのあるところへきました。
「いったいどこへつれていくつもりかしら。」
フローネは早く行き先が知りたくてたまりません。それに、雨がたえまなくふっています。まごまごしていると、びしょぬれになってしまいます。
「ジョン、走ってもいいわよ。」
こんどはぎゃくにジョンをせきたてて、フローネは走りだしました。

ジョンはいさんでかけだします。走ることにかけては、フローネよりジョンのほうがずっとうわてです。またたくまに、フローネはジョンを見うしなってしまいました。

そこは、大きないわのかべがきり立っているところでした。

「ジョン、ジョン、どこへいったの。」

フローネは、うろうろしながら、ジョンをよびました。こんなさみしいところで、まい子になったのではかないません。

「ジョン、ジョンおいてかないで。」

すると、フローネのすぐうしろで、

ワン！

と、ジョンがほえるではありませんか。

フローネは、びくっとしてふりかえりました。

「ジョン、おどかさないでよ。」

見ると、そこはほらあなです。いわにだれがほったのか、それとも、しぜんにあいたあななのか、人が少しかがめばはいれるくらいのあながあいていて、おくはふかい

らしく、中はまっくらです。
そして、その入り口にジョンが首だけ出しているのです。
「まあ、ほらあなじゃない。」
フローネはすぐに、まわれ右をすると、ころがるように、いまきた道をかけだしました。こわかったからではありません。早くおとうさんに知らせなければならないと思ったからです。
おとうさんもフランツも、ほらあなときいて、よろこんでいます。しかし、おかあさんは少しきみわるがっているようです。
そこで、みんなでいってみることになりました。
おとうさんは、銃をもち、フランツは、たいまつをよういしました。
ジョンが、まるでみんなでくることがわかっていたみたいに、とちゅうまでむかえにきていました。
ほらあなの入り口につくと、フランツは、たいまつに火をつけました。
ほらあなの中に、なにかけだものでもいてはきけんだからと、まずおとうさんが、

ほらあなのおくへむけて、銃を一ぱつうちました。

ダーン！

しばらくまちました。なにもうごきません。

「よし、はいってみよう。」

おとうさんは銃をフランツにわたし、フランツからたいまつをうけとって、それをかかげると、先頭になって、ほらあなにはいりました。みんなもあとにつづきます。

すると、どうでしょう、入り口は少しせをかがめないとはいれなかったのに、中はドームのように広びろとしているではありませんか。

でも、たいまつでよくてらしてみると、上はまるでてんじょうになっているわけではありません。まるで水のしずくのような形に、いわがたれ下がっています。そして、下からはタケノコのような形にいわが生えたようになっています。それがいっぱいあるのです。

「こりゃ、しょうにゅうどうだ。」

と、おとうさんがいいました。

「でも、どこにも水がながれていないようですね。」
と、おかあさんがいいました。
「うん。どこもぬれてないし、水の音もしないよ。」
と、フランツがいいます。
しょうにゅうどうには、かならず地下水がながれているものなのです。
「なにかのかげんで、地下水がかれたんだろう。それもだいぶ前。からからにかわいてる。こりゃ、すむのにもってこいだ。ここをわれわれの家にしよう。」
「そうですね。ここなら、どんなに雨がふってもへいきだわ。」
おとうさんも、おかあさんも、大よろこびです。
「わたしがみつけたんだから。」
と、フローネはとくいになっていいました。ほんとうは、ジョンが一番にみつけたのに。
そのとき、フランツが、みょうなかすれた声でいいました。
「あ、あ、あれ、なに。」



フランツがゆびさすところを、おとうさんが、たいまつを近づけてよく見ました。

「まあ！」

おかあさんも、へんにふるえた声で、小さくさけびました。

そこに人間のほねがあったのです。されこうべから、ろっこつ、手足のほねまで、そっくりそろって。でも、形はくずれていました。

フローネは、ふしぎに、こわいとは思いませんでした。

「あら、男のがいこつかしら、女のがいこつかしら。」

と、少しふざけていいました。ほんとうはこわいのをごまかして、ふざけてみせたのかもしれません。

「男だ。」

と、いしゃのおとうさんは、すぐにいいました。

「やはり船がなんぱして、この島にながれつき、ここにすんでたんだろう。」

「ぼくたちも、さいごはこうなるのかな。」

と、フランツがいいました。

「ばかなことをいうんじゃない。この人はたったひとりだったから、生きつづけられなかった。わたしたちは五人もいるじゃないか。しかも、あいし合っている、ひとつのかぞくだ。」

と、おとうさんがいいました。

12　どろぼうがいる

木の上の家からどうくつへひっこしをする前に、どうくつにあった人間のほねを、海の見えるおかの上にほうむりました。

おとうさんとフランツが土をほって、ほねをうめ、フローネがその上に、木の十字架を立てました。

「どこの国の人かわからないが、生まれた国をこいしがっているにちがいない。ここからは海が見える。海はどこの国にも通じている。」

と、おとうさんがいいました。

「きっと、よろこんでいますよ。たとえほねになっていても。」

と、おかあさんがいいました。

そして、みんなはひざまずいて、いのりました。

また、あらしがきました。フローネたちがなんぱしたときのような、はげしい雨風です。そして、こんども、なんぱした船があったらしいのです。

なぜなら、すなはまに、なんぱ船のものとおもわれる、ウイスキーのたるとか、ボートのこわれた切れはしとか、ちぎれたほぬのとかが、ながれついたからです。

フローネたちの一家五人は、どうくつの家にひっこしていましたから、あらしは少しもこわくありません。

ジョンがどうくつを見つけてくれたのは、ほんとうにお手がらでした。

あらしがやんで数日後のことです。おかあさんのやきばたのやさいがぬすまれるという、じけんがありました。

やきばたというのは、草や小さな木をやいたあとにたねをまいたはたけのことです。あたたかく、雨もてきとうにふる土地なので、やさいのそだちの早いことは、おどろくばかりです。とくに、ウリは、ついこのあいだ花がさいたばかりとおもっていると、いつのまにか、もう大きな実が、ごろごろとなっているのです。

そのウリの実のいくつかを、なにものかがぬすんでいったのです。それも、毎晩のように。

そうです、朝、いってみると、大きいのからなくなっているのです。

「きっと、またサルのしわざよ。」

と、フローネがいいました。

「どうぶつかなあ。」

おとうさんが、うたがわしそうにいいました。

「サルにしろ、イノシシにしろ、どうぶつなら、すぐに食べるだろう。そのへんに食べのこしがちらばっていそうなものだ。」

しかし、どこを見ても、食べのこしがありません。ただ大きな実がいくつか、きれいになくなっているだけなのです。

つぎの夜、おとうさんとフランツが、はたけで見はることになりました。

まっくらななかに、ふたりは銃を手に、身をふせて、じっと、ウリが一番たくさんなっているあたりをにらんでいます。

すると、あらわれたのです。たしかになにものかが。くらくて、サルかイノシシかわかりませんが、いえ、どうやらイノシシではないようです。

というのは、そのなにものかは四つ足ではなくて、二本の足で歩いてきたからです。二本の足で歩くのは、人間のほかにサルがいるだけです。すると、やっぱりサルでしょうか。

そのサルらしいなにものかは、やはり、ウリをもいで、むねにかかえました。

フランツが銃のひきがねに手をかけます。

すると、おとうさんが、まて、というようにフランツのうでをおさえました。

そして、おとうさんは、ぱっととび出していって、そのサルらしいなにものかのうでをねじあげたのです。なにものかは、にげようとウリをなげ出して、しきりにもがきましたが、おとうさんは、しっかりおさえこんでしまいました。

「フランツ、明かりをつけるんだ。」

フランツは、よういしてあったたいまつに火をつけました。

「あっ、人間だ。」

フランツは、おどろいてあやうくたいまつをとりおとしそうになりました。おとうさんにおさえこまれていたのは、フランツよりも小さい少年だったのです。

「ごめんなさい、ごめんなさい。」

少年は、色が黒くてヨーロッパ人ではないようです。

ぶるぶるふるえています。

おとうさんは、少年をおさえている手をはなして、いいました。

「こわがらなくてもいい。ウリはほしいだけあげよう。しかし、そのまえに、きみはいったいどこのだれなのか、教えてくれ。」

少年はオーストラリア人でした。水夫の見習で船にのっていたのですが、このあいだのあらしでなんぱして、この島にながれついたのだそうです。

そして、もうひとり、いっしょにながれついたものがいて、その人はけがをしていて、かいがんのいわかげにねているというのです。

おとうさんとフランツは、少年のあんないで、すぐにかいがんへとんでいきました。

すると、岩のかげにねていたのは、年とった水夫でした。ひどいけがでうごけません。

おとうさんとフランツが、けがをした老人をかかえ、見知らぬ少年をつれて、どうくつの家にもどりました。

おかあさんとフローネがびっくりしたことは、いうまでもありません。

いしゃのおとうさんが、老人のけがの手当てをしたことも、これまた、いうまでもありません。

老人はやがて、けががなおって元気になりました。しかし、この老人はへんくつものでした。

おかあさんが、しょくじをつくってやると、老人は、

「わしはスイスりょうりは口にあわんでのう。」

といって、つきかえします。けがで体がいうことをきかない間は、だまって食べていたくせに。

そして、自分でつくって食べるのですが、それがどう見たって、おかあさんのつく

るものよりずっとまずそうなものなのです。
それから、フローネやジャックが、なかよくしようと、老人に話しかけると、
「わしは、子どもはうるさくてきらいじゃ。」
といって、せなかをむけてしまいます。
そればかりか、オーストラリア人の少年がフローネやジャックとなかよくすることもきらいます。
少年がフローネやジャックといっしょにあそんでいるのを見ると、すぐに少年をよびつけて、どうでもよいような自分の用をいいつけるのです。
そして、ある日、とうとう老人は少年をつれて、はじめにいたかいがんのいわのかげにもどってしまいました。
「わたしたちのしんせつが、めいわくそうでしたね。」
と、おかあさんはざんねんそうにいいました。
「なに、気がねをしているのさ。すきなようにくらしてみたらいい。たすけがひつようなときは、むこうから、いってくるだろう。」



と、おとうさんはあまり気にしないようにいいました。
それから二、三日して、はたしてオーストラリア人の少年が老人のつかいで、おとうさんをよびにきました。
でも、それはたすけをもとめにきたのではありません。老人はおとうさんにそうだんがあったのです。そのそうだんというのは、みんなのうんめいを、ふたたび大きくかえるようなものなのです。
おとうさんは、老人のところで長いこと話しこんで、夕方帰ってきました。
その老人は船のりでしたが、わかいころは船大工でした。ですから、船のつくり方を知っているのです。少しはわすれたところもありましたが、だいたいのところはまだおぼえているのです。
けれども、ひとりではつくることができません。それで、おとうさんに、力を合わせて船をつくって、この島から早くにげ出そうと、そうだんしたのです。
もちろん、おとうさんは、すぐしょうちしました。ねがってもないことだったのですから。

よく日から、おとうさんとフランツは、あるだけの大工どうぐをもって、まるで会社へでもかようように、老人のところへ出かけていきました。

さっそく船づくりにとりかかったのです。

森で木を切りたおすことからはじめて、それを、いたにしたり、はしらにしたり、そしてそのいたやはしらをまげたり、組み合わせたりします。

毎日、老人のさしずするとおりに、おとうさんもフランツもいっしょうけんめいはたらきました。

そのあいだ、食べものを手に入れるしごとは、おかあさんとフローネのやくめになりました。

その日その日にみんなが食べるものだけでなく、船で島を出るときに船につんでいくしょくりょうも、たくわえなければなりません。

もうフローネも、あそんでいるひまはありません。おとなも子どもも、毎日毎日、大いそがしです。

しょくりょうあつめには、オーストラリア人の少年が手をかしてくれました。

少年は船つくりの手つだいをするには、まだ力がたりなかったのです。

そのかわり、野生のどうぶつをわなにかけてとったり、木の実をさがしたりすることは大とくいでした。

ヤシの実をとるときなどは、わにむすんだ一本のなわで、えだのないヤシの木を、ヤシガニよりも早くのぼって見せました。

13 さようなら、むじん島

船ができあがりました。形はおせじにもよいとはいえませんが、かなり大きなものです。

七人の人間がらくらくのれます。そのほかに一か月分ぐらいのしょくりょうもつむことができるでしょう。

ついに、このむじん島からだっしゅつする道がひらけたのです。それも、もうすぐなのです。

「ゆめのような気がするわ。」

と、おかあさんが、だれよりもうれしそうにいいました。

「しょうじきのところ、もう一生この島から出られないのかと思ったこともあったからな。」

と、おとうさんも、ひとみをかがやかせていいました。

「ぼくは、ぼくひとりでも船をつくってみせようと思ってたんだ。」
と、フランツは、なんでもないことのようにいいました。
「わたし、むじん島のくらし、べつにいやじゃないけど。」
と、フローネは、わざとうれしくないような顔をしていいました。
ほんとうは、また船にのってかわったことがおきると思うと、うれしくてたまらなかったのですが。
しかし、しゅっぱつの日が近づくと、ひとつのこまったもんだいがもちあがりました。
犬のジョンは、もちろん、いっしょにつれていくことにきまっていましたが、プチクスクスのメルクルはどうするかということです。
「メルクルをおいていくなんて、考えられないことよ。」
フローネは、とうぜん、つれていくつもりでいました。
ジャックはきっと、メルクルをしっかりだいてはなさないでしょう。
でも、おとうさんとおかあさんは、メルクルをつれていくことにはんたいなのです。

「メルクルはこの島で生まれたんだ。ここにおいていこう。手ばなしたくはないが、メルクルのためだ。」

と、おとうさんはいいます。

「そうよ。野生のどうぶつは、人間とくらすより、しぜんの中で同じなかまとくらすほうがいいの。」

と、おかあさんがいいます。

「でも、メルクルはとくべつよ。小さい時からずっと、わたしたちとくらしてきたんだもの。」

と、フローネは、メルクルがテントにもぐりこんできた時のことを思い出して、いいました。

「それは、メルクルがおかあさんをなくして、そだててくれるものがいなかったからよ。いまはもう大きくなったから、わたしたちとわかれても、ひとりで生きられるわ。」

そうおかあさんにいわれると、フローネは、かえすことばがありません。しぶしぶですが、なっとくしました。

しかし、まだ小さくてきき分けのないジャックには、いくら教えてやっても、わかるわけはありません。おとうさんとおかあさんの、なやみのたねでした。

「メルクル、メルクル。」

ジャックは、きょうも、一番の親友のようにメルクルとあそんでいます。

そのメルクルが、あしたはみんなで島をだっしゅつするという日の朝、いなくなってしまったのです。

メルクルは、これまでにも、ジャックが目をはなしたすきに、ふっといなくなることがありました。

どこへかくれるのかわかりませんが、しばらくすると、どこからともなくもどってくるのです。

「メルクル、おまえ、どこへいってたんだ。」

と、ジャックがきいても、むろん、メルクルは答えません。

「メルクルだって、ときには、ひとりきりになりたいのよ。」

と、おかあさんはいったものです。

しかし、こんどはいつもとちがっていました。ひとりになりたいにしては、いない時間が長すぎます。朝、ジャックが目をさました時、もうどこにも、すがたが見えなくて、お昼になっても帰ってこないのです。

「メルクルがいない。メルクルがいない。」

といって、ジャックは、とうとうなきだしました。

「おとうさんとおかあさんが、かくしたんでしょう。」

と、フローネがいいます。

「いいえ。」

「そんなことはしない。」

おかあさんもおとうさんも、はっきり首をよこにふります。

「おかしいなあ。」

と、フランツがふしぎそうにいいます。

ジャックは、ますます大きな声でなきます。

みんなでそこらをさがすことになりました。どうくつの中は、どこをさがしてもいません。前にすんでいた木の上の家のあたりにもいません。はじめにすんでいたテントのあたりにもいません。

さいごに、みんなは森へいってみました。すると、いたのです。メルクルは森にきていたのです。

でも、メルクルは森にひとりできて、まいごになっていたのではありません。もう一ぴきのプチクスクスといっしょに、木のえだの上を、あっちへいったりこっちへきたりして、楽しそうにあそんでいたのです。

「あっ、メルクル。」

ジャックが、まっさきにかけていって、よびかけました。

「メルクル、メルクル。」

しかし、メルクルも、もう一ぴきのプチクスクスも、木の高いところへのぼって、おりてこようとしません。

「メルクル、メルクル。」

「メルクル、メルクル。」
フローネがよんでも、フランツがよんでも、メルクルはおりてきません。
「メルクル、聞こえないのか。」
「メルクル、どうしたの。」
おとうさんがよんでも、おかあさんがよんでも、メルクルは、もう一ぴきのプチクスクスとあそぶのにむちゅうで、おりてきません。
「メルクル、メルクル。」
よびながら、ジャックは、またなきそうになりました。
「ジャック、メルクルにはお友だちができたのよ。だれだってお友だちとあそびたいでしょ。ほっといてあげなさい。」
と、おかあさんがいいました。
「メルクルの友だちはぼくだい。」
と、ジャックがおこっていいます。
「だが、ジャック。おまえはメルクルのガールフレンドにはなれないぞ。」

と、おとうさんがいいました。

「えっ。」

ジャックは、キョトンとした顔をして、おもわずおとうさんの顔を見ました。

「わからないか。あのメルクルとあそんでいるもう一ぴきのプチクスクスは、めすなんだ。つまり、メルクルのガールフレンドなんだよ。友だちもいいもんだが、ガールフレンドはもっといいものなのさ。」

「ハハハハ。」

「ハハハハ。」

フローネとフランツは大わらいです。

「ホホホホ。」

と、おかあさんまでわらいだしました。

「ジャック、メルクルはガールフレンドにゆずるんだね。オーストラリアへいけば、おまえにもガールフレンドができる。ハッハッハッ。」

と、おとうさんもわらいだしました。

「ハハハハ。」
「ハハハハ。」
「ホホホホ。」
「ハッハッハッ。」
フローネもフランツも、おかあさんもおとうさんも、わらいつづけです。
こうみんながわらっていては、ジャックひとりなくわけにいきません。ジャックもとうとうわらいだしました。
「イヒヒヒ。」と、はじめはぎこちなく、つぎは、
「ウフフフ。」となり、それからやっと、
「アハハハ。」と、ほんとうのわらい声(こえ)になりました。
でも、ジャックは、メルクルをなくしたのに、なぜわらわなければならないのか、わかっていないにちがいありません。
これで、ジャックからメルクルをひきはなすむずかしいもんだいは、かいけつしました。

「さようなら、むじん島。」

七人の人間と一ぴきの犬をのせた、手づくりの船が島のきしをはなれました。老人が船長で、オーストラリア人の少年がかじとりです。おとうさんとフランツはこぎ手、おかあさんとフローネとジャックとジョンは、おきゃくということになるでしょうか。

見おくってくれる人は、だれもいません。

それでも、みんなは島にむかって手をふりました。

「さようなら、さようなら。」

と、みんなは声に出して、むじん島にわかれをつげます。

フローネは、心の中でいいました。

「さようなら、わたしのふしぎな島。さようなら、ヤシガニさん。さようなら、木ののおばけさん。さようなら、こわいジャッカルさん。みんなみんな、さようなら。」

（ふしぎな島のフローネ・おわり）



〈お母様がたへ〉

デフォー作の漂流記、『ロビンソン・クルーソー』を知らない方はいないでしょう。デフォーの『ロビンソン・クルーソー』にヒントを得て書いたのが、ヨハン・ダビット・ウィース(Wyss,Johann David)の『スイスのロビンソン』(Der Schweizerische Robinson) です。一八一二年にできたこの物語は『家族ロビンソン』という別名でよく知られています。

デフォーの『ロビンソン・クルーソー』は、ご存じのように、ロビンソンという船乗りがたった一人で無人島に漂流する話です。ウィースの『家族ロビンソン』は、その題名の通りに、一家全員で無人島に漂流する話です。

この『ふしぎな島のフローネ』は、ウィースの『家族ロビンソン』を参考にして書いたものです。

大筋は似ていますが、低学年向きにやさしくしたことを別にしても、いくつかの点で趣向を変えています。

第一は主人公を父親でなく、子ども、それも女の子にしたこと。

第二に、一家の家族構成を変えたこと。両親と男の子ばかり四人であったのを、両親と男の子二人、女の子一人にしたこと。

第三に、難破漂流にいたるまでの経過を頭につけ加えたこと。

第四に、一家に加わる新たな漂流者を一人の少女ではなく、老水夫と水夫見習の少年にしたこと。

そして第五に、無人島からの脱出を、イギリス軍船による救助という他力ではなく、漂流者集団の知恵と努力の結集によって船を建造して自力で果たすということにしたこと。

細部も、まったくといってよいほど、ことなっています。

お子さんたちが、これをおもしろく読んでくださるかどうか、自信はありませんが、もしこの本がきっかけで、ウィースの『スイスのロビンソン』、さらにはデフォーの『ロビンソン・クルーソー』も読んでみたいという気持ちをお子さんたちがもたれるようになれば、それだけでこの本の作られた意義は十分だと思います。

どうか、『ロビンソン・クルーソー』や『スイスのロビンソン』というおもしろい漂流物語のあることを、お子さんたちに教えてあげてください。

（松田昭三）

世界名作ものがたり33

ふしぎな島のフローネ

昭和56年3月12日　初版発行　　　検印省略

文／松田昭三

発行人／村山　実

印刷／フォト印刷（株）

製本／島田製本（株）

発行所／株式会社　朝日ソノラマ

郵便番号104／東京都中央区銀座4－2－6
第2朝日ビル
振替　東京2－40311／電話　東京(563)6021～3

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

(分)8097(製)723033(出)0049



《朝日ソノラマの子どもの本》

世界名作ものがたり

小学校低学年むき　好評発売中！

①アルプスの少女ハイジ
②ふしぎの国のアリス
③家なき子
④フランダースの犬
⑤オズのまほうつかい
⑥ピーター・パン
⑦小公子
⑧あしながおじさん
⑨母をたずねて三千里
⑩ピノツキオのぼうけん
⑪みつばちマーヤのぼうけん
⑫にんぎょひめ
⑬くるみわり人形
⑭しらゆきひめ
⑮トム・ソーヤーのぼうけん
⑯王子とこじき
⑰わかくさものがたり
⑱シンドバットのぼうけん
⑲小公女
⑳たからじま
㉑こじかものがたり
㉒ハックルベリーのぼうけん
㉓ニルスのふしぎなたび
㉔赤毛のアン
㉕アラジンとまほうのランプ
㉖ワンダー・ブック
㉗あらいぐまラスカル
㉘くまの子ジャッキー
㉙ペリーヌ物語
㉚偉人物語
㉛未来少年コナン





朝日ソノラマ

(分)8097(製)723033(出)0049

定価680円